

「その願いは、叶えられない」

時間が止まったような気がする程に。

彼女は何の表情を浮かべる事もないまま、そのままの虚ろな笑顔で、オレを見ながら更にはるかに遠くを見ていた。

「……何とか言えよ。……何でも屋」

何でも屋としてヒトの業ばかりを糧にしたと語る彼女に、余計な事しか言えないオレに。

何の光を持たない眼差しでも、この時だけはまっすぐに、オレの目を見て……彼女は、満足そうに笑った。

— 依頼にこたえられない何でも屋ならば、ここに存在している意味はないと。

それは、これまでのどんな笑顔より儂げで、同時に清らかなサヨナラだった。

E L I X I R

くサビタカギく

— 長く気だるい微睡みを越えて、東の間の眠りに入る前はいつも。聴こえてくるのは、永い暗闇への誘いの声ばかり。

「……人間で言うなら、君は癌だ。あと数年もしない内に、死を迎える事になる」

そんな風にハッキリと言われてから既に三年はたっているのに、未だに顔を見せない死神には、むしろイライラさせられる日々だった。

事の発端としては、次のような話だ。

「君の左肩には、八年前に死んだ君の妹の魂が埋め込まれている」

という事らしく、オレはその影響で衰弱し、やがて死に至ると言う。

それはとある悪魔の手による、文字通りの「悪魔の所業」というヤツなんだが、最初に気付いた知り合いの友達悪魔のおっさんは、人間のような苦しい顔をしながらオレの古傷をまじまじと眺めたものだった。

「君の双子の妹は、あの事件での死の間際、魂だけを君の身に移されたんだろう。君が死に瀕している隙に、その傷を通して」

「……はあ。あの時オレも切り刻まれたのは、つまりはそーいう必要性だったんですか」

「あいつは多分、「妹」じゃない、自分が姉だつて言うんだろうけどな。なんてどうでもいい事をぼけーつと考えながら。」

「どうやら姉貴がとり憑いてるせいで、いつまでも色褪せずに残っている左肩の傷痕を、クセのように軽くさすつた。」

その傷痕を起点に、何本も心臓に向かってのびるかのような赤黒いアザは、いかにも呪いという感じで、さながら蜘蛛の足のようにだった。一応可愛い系だった姉貴の存在感なんて、全く見る影もない。

「……衰弱するってーのは、聞いてたけど」
更に困ったことにはこの数年、この傷痕から強い発作が起きるようになっていた。

痛みというか違和感というか、とにかく唐突に、その何とも言えない苦しみは、時と場所を選ばずにやってくる。夜に起こることは多いが、最近は回数も段々と増えてきていた。

……発作の後に眠りに落ちてしまえば、見る夢は大差なく、静かで薄暗いものばかりだ。

このシスコンと笑う、黒い女の姿が浮かぶ。

「大丈夫。その呪いよりも先に、あたしが、あなたを殺してあげるから」

その黒い女は、約束だからねと軽く微笑む。

そのまま幾人もの血を吸った死神の刃を、いつかここで、振り下ろしてくれるのか……そんな思いをよそに、意識を微睡みへと引き戻していく毎朝の音が、そろそろ響いてくる頃合いだった。

「おはよう。朝がきたよ」

日の光もろくに差さない内から訪れる白い影。肩だけが外に出た白い功夫服もどきを愛用する少女が、北側の角部屋に押し入ってくる。

「ラストイ、起きてる？」

オレがこの町に来てもう一年以上たつが、半分以上の夜を発作で苦しみ、そしてそれ以上の朝をこの声と共に迎えていた。

「……………ん……………」

今ほど発作が頻繁に起きるようになるまで、

オレが住みつき働いてた場所……炎と風の国「ディアルス」と言えば、この人間だらけの

商業都市「ウィル」では、誰もが口を揃え、同じ事を言うだろう。全国から化け物を集めて住まわせている国。または狩っている国。

世界に千種はいたと言われる、人間の姿をしながら人間ならぬ「力」を持つ様々な種族、通称「千族」。かくいうオレも人間ではなく、千族に分類される稀な出自だ。

「へえ？　どんなおふれだよ？」

そう言うのとタツクは、号外のチラシをオレに手渡す。その内容を一目見ただけで、何だか言葉にしづらい複雑な感情が走った。

「……すげーな、これ。病人と老人は全員、合法的に安楽死させてやるって事？」

「生産的活動？　に携わる見込みのない者は、この都市にいる限り、半強制的にみたいやな。」

一カ月後の総会を通過すればやけど……何を考えとんねん、この新都市長」

「こんなん、絶対に無事に済むわけないで、と。」

タツクは苦い顔をしながら、俯いて溜め息をついた。鳥頭な短い緑色の直毛が、右目にかかって煩しそうだ。

「下手したら、俺らにも何か火の粉が振りかかるかもしれない。この政策のために住民登録とか身元証明が厳しなったら、洒落にならんんで、ラスト」

「—そうか？」

トーゼン、言いたいことはわかるんだけども。

基本笑顔でシンプルな顔立ちで、しかも常時エプロンなタツクには、シリアスな顔付きは全く似合わないの、気楽+皮肉なホホエミで頬杖をついて返してやった。

「下手したらどころか、オレなんてそのまま安楽死対象者だと思っただけな？　生産人口以外の成人はアウトって事なんだろう？」

「ディアルスを出て以来、無職歴更新中の病弱なオレだから間違いないというか。」

「なんやとー！　アホがあー！　俺らがそんな許すと思っただけのかあー！？」

朝からカレーなんて食ってるせいか、暑苦しい男は、ばんと机を叩いて立ち上がった。

「大体オマエ、元々自宅職人の家系やないか！　ていうか俺らが人間ごときに殺られるわけないやろーが！　返り討ちにしたるー！」

「それで人間を敵にまわし、迫害されて全滅するとう筋書きなわけか」

「妙な訛りのあるコイツの言わんとする事は、つまりそういう結果になるだろーな。」

暑苦しい男の相手にも飽きたので、食事部屋を後にすべく、椅子からゆっくりと立ち上がった。

「—待てや」

「腹減ってない」

立ち上がったままのタツクがヒトの肩に両手を置いて、抗議の目を向けてくる。理由はわかってるので、いつも通りの答えを返した。

「今日のは自信作やねん！　別に無理して沢山食えとは言わんから、味見して感想よこす事がオマエの役目やねん！」

「それ、毎食同じ事言ってるじゃねーか」

「サキがいるだろと言っても、あいつは何でもウマイ言うてくれるからアカンねん！」と、

天に唾するような事を口にするタツクだった。さすがにオレも毎食は付き合えないので、

今日はあっさり振り切って自分の寢床へと帰ったのだった。

背後から、昔のらつ君は素直で可愛かったのにと、いつも通りの兄貴的グチが鳴りつつ。

*

部屋に帰ると、少し気が抜けたせいか。

「っ……っ！」

左肩から体の奥まで侵入し、心臓を掴もうとするかのような、激しくおぞましい不快感。

全身に緊張が走り、来るべき事態に備える。

幸いにしてここは自室なので、左肩を掴みながら遠慮なく崩れ落ちると、床に頬をつけたのたうちまわった。

「ああッ……ッ」

それでもサキやタツクに気付かれないよう、無意識に必死に声をひそめた。

痛みとも悪寒とも言えるソレは、古い傷から溢れ出す悪魔の囁きだ……このままこの苦しみに身を任せて、眠りにつけばいいのだと。

——この傷は必ずいつか命を奪う。早いか少し遅いかだけの違いで、受けた以上は決して覆す事は出来ない。

「っのやろ……ッ」

そう言われてても、未だオレが命を長らえている理由はよくわからないが……一つには。

「ん……っ」

袖口にひそませてある、いつもの薬を口に含むと。その先にある変化に身構えるかのように、全身がきしんで硬くなった。

左肩に刻まれた蜘蛛の足は、心臓を目指して少しずつ触手を伸ばしていくようで、

——発作が来たら、決して、眠ってはいけない。

傷の侵蝕をおしとどめるために、意識を強くもって闘わなければいけないよ——

そんな事を誰だかは言っていたが、生憎そんな根性はないので、オレはこうして体を活性化し、代わりに闘う薬を自分で開発していた。

「……いてー……」

自前の薬はいつも、傷との闘いの結果か、痛みを更に激化させる。

あまりの痛みに、やっぱり眠ってしまった

くなった。でもそれで意識が落ちると、薬が切れた後、次の目覚めはない可能性もある。

——結局……潮時なんだろうかと弱気になる。

一度使うと効果は半日くらい持つが、こころも発作が頻繁になると、薬自体の負荷から体が崩れてきていた。人間が飲めば死ぬような薬を飲んでれば当然だろうけど。

……。

……。

痛みは続き、ひたすら丸まって意識をとどめることに集中する。

……。

……今回の発作は、いつもよりもかなり長く続いていた。

—トン、トン、トン。

呻く力もなくなってきた、意識が危うく、落ちそうになっていた頃。

路地裏に面する自室の窓から、最近は聞き慣れてきていた、控えめなノック音がした。

「……ん」

その音で何か切り替わったのか。急速に左肩の痛みが、意識の片隅に追いやられていく。

左肩を押さえてゆっくり起き上がったオレは、呼吸を整えてから、静かに窓を開けた。

「はい、ラストイ君。取り込み中だった？」

「……別に」

ノックの主の遠慮と抑揚のない声かけに、状況わかってんなら呼ぶなど、左肩を押さえる手を力を込めてアピールする。

丁度肘の高さの窓枠に両腕を置いてオレを見上げるそいつは、そういった主張に敏感なので、含みのある顔でニコッと笑った。

「何の用だ、朝っぱらから。仕事あるんじゃないのかよ……SKY」

「勿論、ニイトのラストイ君とは違うからね。仕事のことで用があるからきたんだけどね」

真っ直ぐな長い黒髪を肩の高さで束ね、黒いハイネック+パンツスタイルに黒のケープと黒づくめの女は、オレを見る目まで黒一色だ。

「今の職場は、先週から新しく決まったってこないだ話したっけ。あたし以外にも護衛を募集してるから、戦う武器職人のラストイ君を見込んでスカウトにきたわけ」

「誰が武器職人だよ」

確かにオレは武器も造るが、本業じゃないし。余程認めた相手にでないと造つてやらないし、そもそも武器造りは好きじゃない。

とりあえず武器でも薬でも道具でも何でももの造り系の何でも屋がオレなんだろう。

「そういう意味じゃ、あたしも本来護衛じゃないけどね。向いてる職業を一押しされるのは仕方ないでしょう」

この二十台に見える黒一色の女、通称SKYは、問題解決型の何でも屋な仕事人だ。こいつなりの人知で可能な事なら、あらゆる依頼をこいつから指定する代償付きで引き受ける。

「……あんたの何処が護衛向きなんだよ」

その細っこい華奢な体つきで……。オレもヒトの事は言えないし、人間でないオレ達の力は、そういうところには常識だけど。

「生憎 求職はしてない身の上なんでね」

「知ってる。でもこの仕事は融通が効くし、何より、興味があるんじゃないかと思う」

初めて会った時から全く変わらない笑顔で、依頼書のような紙切れをサラリと手渡す。

「……へエ。……ふーん……？」

嫌々目を通すと、悔しいながらそいつの言う通り、複雑な思いを抑える事は出来なかった。

*

町を歩くと、何処もかしこも例の新政策の噂で持ちきりのようだった。

「……警備隊もちらほらいるな……早速厳戒体制つてわけか……？」

あんな発表の後には反発は必至だろうけど。

「どうしましょう、病気の妹がいるのに……あと一ヶ月の内に受け入れてくれる町を探せというの？ ……そんな……」

「外に行けば済む奴らはいいさ。うちなんてじーさん二人ばーさん一人を全員退去なんて不可能だぞ」

至る所で人間達からの不満の音がきかれる。

「障害者や寝たきりは死ぬか出て行けつてーのか！？ ふざけてやがる……！」

「何処にどうやって行けばいいんだ……」

人里から人里への往来は危険が多い。

「……ウープゲートとか船が使えれば、まだしもって感じではあるけど」

そこまで辿り着くのにも危険はないわけじゃないし、そもそも金がない奴らも沢山いるし。

「ただの人間には相当……ムリな話だよな」

閉鎖的な人里が多いこの世界では、旅のハードルは高いだろう事はわかりきっていた。

この商業都市ウィルや大国ディアルスが存在するのは、世界の3つの大陸の内、広くて

人口が多く、わりと開発が進んだ西の大陸だ。

それでも町村間の山々や森は険しく、魔物が未だ、沢山住み潜んでいる。

「かと言って、今時ディアルスとかに住みたくないなんて奴もいないだろうし」

というのも、大国は大体何らかの異種勢力と繋がると言われ、実際にディアルスは、オレ達のような千族を公的に国民と認めていた。

人間と千族が共生する場合、千族はいくら少数でも力が大きいので、事件が起こると被害は弱い人間に向きやすい。

それなら千族がない前提の人間自治圏である商業都市を離れるのは、人間としては嫌に決まっていた。

目的の場所に寄った後、家に帰り着くと。

予想外に早く、厄介事到来の匂いがしていた。

「……つたく」

オレは正直、面倒は御免だからこの町に来たのに、かつたるい事この上ないな……。

その発信源、ドアの向こうの食事部屋からは、タツクの苛立った声が響いてきている。

「だから、俺達はここに長居するつもりはないんだ。何度言ったらわかる」

「いずれディアルスに帰られるという事は、何度も伺っております。それでもこのウィルに滞在される間は、ウィルでの居住の登録を行っていただかなければ」

「旅人全てにそんな登録をさせようとしたら、商業都市自体が機能しないだろう。俺達はこの住人になる気はないんだ」

「しかし、貴殿方の滞在期間については、既に一年近くになっておられ……」

例の政策を施行するにあたって、準備段階として、早速今日から都市内の居住者チェックが厳しくなったんだらう。状況は予想していた通りだった。

「！ ラステイ！」

食事部屋の様子を伺っていたサキが、帰ってきたオレに気付き、焦り顔で駆けよってきた。

「お帰り、何処いったの？ 何か今ね、急に役人さんがやって来て……」

「見ればわかるよ。思ったより早かったな」
タツクやサキの危機感もさもなん。

「ま、実際オレ達、不法滞在者なわけだし」
戸籍とか持つてる方が珍しいまっとうな血筋の千族なら、普通は焦るわけで。

食事部屋から聴こえるタツクの声は、より一層辛辣さを増したようだった。

「ウイルとディアルスで二重の居住登録をさせるつもりか。それならまずはディアルスに、話をつけてもらうのが筋だろう」

「おとーさん……」

ドア越しに聞き耳をたてるサキは、タツクの声色の低さと冷たい口調に、顔つきはひたすら浮かなかった。

タツクは元々、標準語で喋れる。

「というかオレや昔の仲間以外には、あの中途半端な訛りは聞かせないのだ……五年以上生活を共にしている、サキに対しても」

「し、しかし、こちらがそこまで貴殿らの面倒をみる筋合いなど……」

「ウイルで居住登録をするなら、俺達はこの都市民となるわけだ。都市民に対する態度がそんな事では先が思いやられるな」

誰が都市民だ！ と、ついに役人がキレてしまった。

「それではこの場で、三日以内の退去か不法居住の罪による連行を選んでいただく！ 抵抗されるなら都市法執行への妨害行為として、やはり連行する！」

……多分この反応は、役人的に、タツクが怖くなかった結果なんだろう。

それともこの役人が、千族の存在を信じていないのか、若くて職務熱心なのか、ただの世間知らずか。

この世界ではわりと周知の、「出所の知れない旅人には注意せよ」や、「ディアルスの関係者は千族だと思え」的な、暗黙の了解を知らないのかもしれない。

「もしも千族なら何されるかわかんね……
……って帰ってく人間の方が多いのにな」
タツクにもこの反応は想定外だったようで、ちよつと待てよ！ と焦りと怒気の強まる様子を見せていた。

「……はあ」

これ以上アイツがヒートアップすると、ろくな事がなさそうなので。オレは不躰に食事部屋のドアを押し開くと、不毛な論争に嫌々参戦しましたよ本当にお疲れさんオレ。

……。

……結果だけ言えば。

ウィルで居住登録はせず、旅人としての退去期限は、三か月先に延びましたとき。拍手、ぱちぱちぱち。

「ど……どーなってんねん？」

ポカーンとしているタツクの一言。その答えとしては、時間は数時間前に遡る事になる。

「……あれ？ ラステイ君？」

来てくれたのかい？ と、飾り気がない白い建物の一つの小部屋の中、その空気をものともせず寛いでいる三十路男が、部屋に入ってきたオレを見て無防備な笑顔を浮かべた。

「嬉しいな。最近お見舞いの人も減ってきてたから。ほら、座って座って。彼女もきつと、君が来てくれて嬉しいと思うよ」

部屋の端で灰色のベッドに横たわる女性……その傍らに座り、いくつも書類をチェックしながら男は、見舞い品らしいお菓子とお茶を勝手にオレにふるまう。

女性はもう一ヶ月近く昏睡したままなので、この部屋の主はある意味、彼なのだった。

「んで。メリナ裁判官の容態は変わりなしですか、ウエイド検察官」

「もう裁判官じゃないよ。とつくに除名されちゃってるからねえ」

僕も検察官なんて言われると照れ臭いなあなんて。黒髪で七三分けと、マジメだが穏やかな風貌と表情からは、確かにこの男が犯罪者を糾弾してる姿は想像しにくいのだった。

「最近はやっと、睫毛が動くこともあるんだよ。体重はもう随分落ちてしまったけどね」

「……それ、二週間前も同じ事を聞いた」

「そうだったかい？ 前は、睫毛が動いた気がする！ だったと思うけど……」

哀しい程に穏やかに語る男は、別に、女性の連れ合いでも何でもない。

文字通り検察官と新任裁判官という知り合いだだったが、検察官の方は裁判官が判事補の頃から片思いをしていた。

女性がこの状態になってからは、身寄りのない女性の世話を献身的に行ってはいらぬもの、女性がいつ目覚めるのか、目覚めた時に彼をどう思うのかなど、何の保証もない。

……そもそも女性は、昏睡となる前、自ら周囲の記憶を全て失っていた。

それでも男は、健気に女性を見つめ続ける。「ストーリー的には、大事な違いだったな。すまない」

「いやいや、まだまだだよ。僕の観察レベルは並大抵のストーリーなんか足元にも及ばない領域だと自負してるからね」

寂しい笑顔で冗談めかした事を言う、身の程を弁え過ぎた彼に、オレは改めて目を細め、冷めた視線を送るくらいしか出来なかった。

「頼みがある」

「―？」

場が静かになったついでに、単刀直入に言う。

「例の新政策のことだ」

そう言うと、男はみるみる険しい顔になった。

「そうか、もう一般公布されたんだ。馬鹿げてると思えない、あんな暴挙が……」

「今後は居住登録が厳しくなるはずだ。オレはここで登録する気はさらさらないから、何かあったら書類レベルで握り潰してくれよ」

「無茶言うなあ……不法居住は管轄内だけど、僕に犯罪しろって言ってる？ それ」

「三ヶ月でいい。資料紛失とか何かで、退去チェックリストに載るのを遅らせてくれ」
ええ？ と男は、悲しそうな顔をしてオレの方を見る。

「それってつまり、ラストイ君、三ヶ月後にはいなくなっちゃうのかい？」

「……関係ねーし。例の政策にちよつと関わることになったから、それくらいはいるかと思っただけだ」

「なーんだ、良かった……って、でも、それでも犯罪スレスレには違いはないけどな。無理やり居住登録なんて馬鹿げてるし、君が悪い人じゃないのも、わかっではいるけど……」
根っからマジメなウエイド検察官殿は、公僕としての良心と、オレへの厚意の間で揺れ動いているようだった。

「あのSKYが。新都市長と組んでる」

ぴくりと、ウエイドの表情が固まる。伝えたくない事だったが、オレがこの件に関わる以上は、いずれ知られてしまう事だろう。

「表向きはただの護衛だ。例の政策を実行する上で、暴動や反発を恐れてのことだろうな」

―けれど。それならそれで「何でも屋」ではなく、ただの護衛を雇えば済むはずなのに。
「メリナさんの時みたいに、何か厄事が裏にあるはずだ。……新都市長の事はどーでもいいが、あいつの目的は気になる」

「あのコ自体が……あの新政策の立案に何か、関わっている？」
無言で肯定を示すオレに、ウエイドは厳しい表情のまま、横たわるメリナの頬にそつと手を当てた。

「生産的活動に携わらない者……彼女も当然、このまま眠り続けるなら、安楽死の対象とみなされるんだろうね」

コイツの怒りの焦点はそこだけじゃないけど、それが大きなウエイトを占めるのは確かだ。
「わかったよ、ラストイ君……むしろ僕からお願いしよう。あのコが何かまた……護衛という立場を悪用し、彼女のような不幸な人をつくるというなら。可能な限りこの町にいて、それを阻止してほしい」

……メリナが新任裁判官となった五ヶ月前。
SKYは元々、メリナの護衛に雇われたのだ。

「……ん、まあ。その代わりオレも新都市長の護衛に、雇われの身になるんだけど」

「ええっ、どうしてそんな！ ラステイ君、体は大丈夫なのかい？」

「知らねー。突然死するかもだし、大した役には立たないって言ってるのに、向こうが雇うって言うってきたんだよ」

これだけ渦中にあっさり近付ける方法は中々ないので、オレも申し出を受けると決めたわけだけだ。

それでも、とウエイドは、何故か嬉しそうなキモチワルイ顔でオレの方を見た。

「最近ラステイ君、前より顔色良くなったよ。就職先は心配いっぱいだけど、働く気になったなんて凄じくないか」

「ヒトを社会復帰前ニイト扱いすんな……」
というか、働こうと思ってるんじゃないかって、興味本位で潜入するってだけの話だし。

ウエイド、メリナに初めて会った三ヶ月前

は体調も激悪、気分的にも腐ってた。ピークで、お人好しなこいつらは頼みもしないのにヒトのことを気にかけてたのだ。

……オレが人間ではない事を、おそらくは気付きながらも。

「それにしてもラステイ君、退去チェックリストなんてよく知っているね。そりゃまあ、誰でも想像くらいはすると思うけど」

えらく確信に満ちて言っていたよね……と。昔な、とだけ呟いたオレに、ウエイドは不思議そうな丸い目をする。

「……ところで」
話を逸らすためじゃないけど。ここに来た本来の目的のモノを、ポケットから取り出した。

「それ……何だい？」
メリナの枕元に置いた、小さなポプリケース。中身はここ二週間で調製した、人間向きに出力を抑えた薬を含ませたハーブの粉末だった。

「匂いって直接、脳まで届くって話だからな。

ダメ元で良ければ使ってみてくれ」

「ラステイ君……」

じわりと、喜怒哀楽が正直なウエイドの両目に涙が滲む。仕事をしながらメリナの付き添いを続けるコイツにも相当な疲労が溜まっているはずで、今度来る時は滋養強壮系の薬も必要か、なんてポツリと考えながら、部屋を後にしたオレだった。

それでもって、帰ったら早速役人の騒ぎで。言う通り三日後に退去するから、今日は帰ってねーと、穏便に役人を追い返した顛末なのだった。

実際はウエイドに依頼した通り、まだ三ヶ月は居座る気ではあったけど。

「ああもお、腹立つわー……ほんと闇討ちしたろーか、あの世間知らず役人が」

「エプロンしてハタキ持って出迎えるお前が悪い。口調変えたって凄みも何もあつたもんじゃない」

大体、この下宿の借主はオレなので、タツクが対応すること自体が間違ってるし。とはいえやってくれる分には手間が省けるので、出来れば丸投げしときたかつたんだけど。

「あの検事さんに頼んだってゆーけどな、三日後にさっきの奴が直接確認に来たらどないすんねん？」

「居留守でも使えよ。それかお前とサキだけでも先に退去したらいーんじゃないか」

オレは半住み込みのバイトで留守にするから。とは告げず、前から何度もコイツらに言っている、

「そろそろディアルスに帰れよ。この間も催促の使い魔、きてただろ」

一番の弱味を、改めて口にした。

「……………」

タツクは一気に、不機嫌レベルが増したような顔になると。ヒトの顔だけでなく、頭からつま先まで、全身をまじまじと覗き込んだ。

「……ヘンタイかよ、オマエ」

「喧しわ！俺がディアルスに帰る時はな、オマエの全身状態が改善したのを見届けてからやって心に決めてるんや！」

「……その日、来なくねーか」

オレがキレイに片付いてからってーなら、わからなくもないけど。

「ええい、暗い話をあつさりばつさり口に出すもんじゃない！これ以上ワガママゆーなら、オマエもここにいてるってディアルスの連中にばらすからな！」

「………理不尽な奴」

何がワガママなのか、居候してんのはそっちの方だし……とは思いつつも。

ディアルスからの帰国要請という火の粉が回ってくるのは避けたいオレは、仕方なく黙るのみ。

部屋を出ると、サキがドアの左隣で壁にもたれ、ぼけっと天井を見ていた。

部屋から出てきたオレに視線を向ける。

「ずっと聴いてたのか？ ……入って来ればいいのに」

「ううん……大切なお話中だつて思つて」

サキの足元には、灰色一色で猫型の、猫にしては大きめの小獣がまとわりついており、小獣はオレを見上げて小さく啼くと、唐突に体が透けて消えていった。

「ラストイ、大丈夫？何か疲れてる？」

「……そーか？」

役人がいたさつきまでとはうって変わった、穏やかな顔をしているサキだが、オレから見ると、こいつこそ覇気がないように思えた。

「サキは、疲れたのかよ？」

「……うん。ちよつとハラハラしちゃった。でもラストイがちゃんと解決してくれたから、へーキだよ」

ありがとう、と笑うと。それを言うためだけに待っていたかのように、すぐに自室に戻ったサキだった。

「……………」
別に、てめーらのためじゃねーし……………と言う間も与えない辺り、タツクより上手だ。

「……………護衛のこと……………」
言いそびれたじゃねーかと。一人こちながら、部屋に帰った。

夜だけ自動で鍵がかかるよう、勝手に造り変えた自室のドアは、オレの気配を認識すると独りでに開き、勝手に閉まった。

「……………！」
寝床と物入れ、武器と作業台で埋まった部屋に入った途端……………またもや左肩に強い悪寒。今朝といい今といい、気が抜けるとこんなリアルタイムで、体に反映するようになってる……………それが意味する事は多分、たった一つだ。

「……………げほっ」

褐色のカーペットに倒れこみ、体を丸めて、妙な息のし辛さに重く咳き込むと。口の中にはつきりとした、鉄の味が広がっていった。

「……………まじかよ」

一応初めての事に、背筋が冷やりとする。リアルな赤色に少しだけ動揺してしまった。いつかは有り得ると予想はしてたけど、左肩の傷痕はこの度、肺まで達したんだろう。

「まあ……………前兆はあった、けどさ」

メリナに渡した、本来なら長くても二日程度で出来るはずの小物造りに、二週間と言わば七倍かかった体調を思えば。

「……………」

……………あーあ、と。

左肩を押えながら右向きに丸まり、痛みの方にのびる左手を、霞む目で睨みつけた。

「……………動かねー……………」

左手は、強く握ることも肘を曲げることも、ほぼ出来ない状態にまでなりつつあった。

……………利き手でないのはせめてものだけど。

「……………職人的にダメダメ……………護衛だって戦力……………七分の一以下なんじゃねーか、これ」

薄れそうな意識で何となくの数字的な美感。そんなヨロヨロの奴をこの仕事に誘った時の、SKYの言い草を思い出す。

―別に、戦つてもらう必要はないよ。ラストイ君にお願いしたいのはアイテム開発だから―まあ。千族だとばれないためにも、それくらい弱い方がいいのかもしれないけど。

不快感を持って余しながら咳き込みは続き、結構な量の、暗赤色なモノを吐き出していた。

「……………くそオ」

―こわい……………？と。

内なる霊が珍しく心配げな声をかけてくる。「別に……………ただ」

悔しいだけだ、と。行き場のない思いを一人で飲み込むと、それは自然に、オレの中に住むそいつにも伝わったようだった。

念のために断っておくと、今は姉貴ではない。姉貴はあの時死んでるわけなので、その後オレと話せたことはほとんどないのだ。

—どうして悔しいの……？

そいつのおかげか悪寒は少し和らいだけど。オレの中に住むそいつは、自分がその理由の一つという事に気付いてるのか、そんな言葉をおろそかに投げかけてきた。

「精霊の使えない霊法士……なんてさ」

……霊法種族。オレに流れている千族の血。千族の中でも特殊な、いわゆる「魔法」とは反対の力を使う種族なわけで。

大体の力ある種族は、「魔力」を基盤にして様々な奇跡を実現させる。けれどオレ達は霊的な存在や一部の人間のような「霊力」でもって、魔力よりも間接的な能力行使をするタイプだった。

魔力と霊力の違いを簡単に言うなら、魔力は個々の躯体から生じる力だが、霊力は魂から生ずる力だ。魔力は何かを消費することが前提の力で、人間世界で言えば例えば、固形燃料を燃やす時の点火にあたる。対して霊力は、同じ加熱でも、電熱器を稼働させるための電力が近く、何かを補助する働きになっているというわけだ。

そんなオレ達の力、霊力は、もの造りや精霊などの契約においてとても相性がいい。素材の強化や、既に出来ている物に力を与えて改良とか携帯型にも出来るし、精霊や召喚獣といった強力な超自然的存在は、魔力で半ば無理やり使役するより、霊力で支援して協力を仰ぐ方が、互いにとってやりやすい。どっちの方が強力かは別問題だけども。

そんなわけでオレは生まれた時から、故郷の泉の主である精霊と契約しているのだが。

「それがそもそもの間違いだったよな……」
夢うつつの中……自分の生立ちを思い出した。

うちの種族は本来、女しか生まれない。

女が精霊の子を宿すことで契約の手間を大幅に省いており、生まれた女は精霊を魂に宿しつつ生物として成長し、精霊としての一面でまた将来、精霊の子を宿すというわけだ。

「……のはずが。何で男に生まれたのやら」
突然変異ではあるが、Y染色体？ の有無以外は姉貴と全く同じなせいかな、一つだけの精霊は姉貴でなくて、オレに宿ってしまった。

おかげで精霊の加護の無い姉貴は、小さい頃から体が弱く、オレも子孫を残す能力はないらしく、特別な巫女の家系だったうちの血は絶えることになったわけで。

ほんつとーに、だからオレは凄く疎まれていて、オレの精霊を何とかとり出して姉貴に移そうと、半殺しにされて里を出たのが十歳の時の話だ。

そこからは姉貴にも、姉貴が命を落とす直前まで、ほとんど会うことは出来なかった。

「我ながら何て、惨澹たる生立ちだか」

それでも……救いは半殺しの目にあつた時、母さんの手引きで何とか逃がしてもらえた事くらいだろう。母さんは巫女として里の奴らの要求には抗えなかったが、オレも姉貴も、どちらも大切にしてくれていたのだ。

淡く暗い藤色の髪を真っ直ぐ片側に束ねて、いつもベッドにいた姉貴。

母さん以外の誰とも深く関われることはなく、髪と同じ色の目はいっ見ても寂しそうで、華奢過ぎる体は、少しでも触れたら壊れてしまいそうな危うさに満ちていた。

「ラテイちゃんは、精霊さんと話すのとても上手ね」

突然変異とはいえ、精霊を制御する能力は高いオレを、姉貴はいつも嬉しそうに。

……そして羨ましそうに見つめていた。

オレだって、いつかこの力で彼女を守るんだって、子供心に誓ってたんだけど。

「それがどうして、こうなったのやら……」

今や、精霊に霊力を与えるにはオレの方のコンディションが悪過ぎ、逆に精霊の加護で何とか体が保たれてるようなものなのだ。

「……オマケに、片手が動かないときだ」

一番得意だった、自前の武器での戦闘ですら、これじゃ問題外だし。ディアルスで国境警備隊長をした数年前とは比較にもならない。

「元が多才過ぎたんじゃない？」

そんな風に笑う、むかつく黒い女もいるが、昔のオレを知る奴は大体、今は別人のようだと苦笑うことが多い。

ぱつと見、姉貴との見た目の違いは、髪が短いことくらいだったオレだけ。今では表情が違い過ぎるせい、自分の姿にも姉貴の面影を追うことは出来なくなっていた。

「痩せて目つきが悪くなっただけでしょ」

「うるせー……」

S K Yに言われた事をまた思い出し、ふてくされてそのまましばらく、カーペットで蹲っていたら……発作が治まると共に、眠りこけてしまっていた。

……寒いな、風邪ひいたら就職やばいかな。

そんなことを微睡みの中で思いながら、実際は護衛自体が無謀なので、クビになるならなれ。という勢いで、そのまま寝付く。

……本格的に眠りに落ちていく刹那。

もふもふと、見たことのない灰色の犬が、寝床からくわえ出した毛布をオレにかけ。隣に寝ている夢を見たような気がした。

どうせ夢ならとぬいぐるみ感覚で抱きつく。

その後、目が覚めたら何故か寝床の中だったので、いつからオレは眠って何処までが夢だったのか、正直さっぱりわからない。

*

「へ……？ 護、衛……？」

「なっ……何だとおお！？」

一日寝かせたヨーグルトカレーを、三人で仲良くモーニングしてる場で。改めてオレは、就職が決まった旨を二人に伝えた。

「つて、その左手で大丈夫なのか！？」

流石は、全身状態を常に観察してるらしい暑苦しい男、ヒトの体調をきちんと把握してやがります。……口調はサキがいるから標準語だけ。

「双鎌は無理だからあのまま部屋に置いてく。暇だったらサキ、使つていい」

「えっ……」

前からサキは、オレの部屋にある「双鎌」と名付けた長物を気に入っていた。単に双端に刃のついた大鎌という、オレ製にしては大きな工夫もない、切れ味だけの代物なんだけど。

「で、でも、ラストイ……仕事つて何で？」

「小遣い稼ぎ。誰かさん達がずっと居候してるせいで、うちにはもうお金がないのです」

「嘘つけ！ 財布の管理してるの俺だろう」

……コイツが標準語使うと、オレとキャラがかぶるんだよな。紛らわしいったら。

「しかもよりによって、あの新都市長の護衛だつて？ ……オマエ、何企んでる？」

「暗殺」

即答してみたオレをタツクは一蹴する。

「ないな……人間相手に、オマエに限って、それだけはない」

むしろそうしてくれたら……と言いかけて、サキの苦笑いな表情の手前、タツクは「ほん」と咳払いした。

「とにかく、いつ倒れるかもわからないその

体調で、どういう事なんだ。理由があるのはわかるから、説明してくれ」

「……」

……それを言われると、正直オレも少し困るのだ。

「……知り合いの腹黒い、つてかもろに全身黒い奴から、直々ご指名で誘われたから」

何かあるんだろーなと思つて。というところまで、一応正直に説明すると。

タツクもサキも、「……？」という目をして顔を合わせ、困ったような表情をして、改めてオレの方を見た。

「……そいつ、やばい奴だから。ほつとくと後がどうなるかわからない」

何がどうやばいのか、直感だけでオレもまだはつきりわからない。「老人と病人を安楽死」なんてぶつとび過ぎる新政策をたてる都市長に、やばいあいつが関わってるという嫌な状況だけが、今オレを動かしてるのは確かなんだけど。

「何か……全くよくわからないが、とりあえずわかった」

タツクは珍しく、物分り良く頷くと。

「なら才蔵と一緒に連れていけ。オマエの看護と、情報収集の助けくらいにはなる」

と、面倒くさいことこの上ない妥協案を提出してきやがるのでした。

「看護って……あんな鳥に何が出来んだよ」

「あんな鳥言うな。オマエが体調崩したら、俺達が駆け付けられるために決まってる」

鳥の才蔵が何か気付けば、タツクにもそれはすぐに伝わるのだ。理由はまた少し後で。

「それ、看護じゃなくて監視って言わないか」

「それならヴァシユカも、一緒にどうかな！」
「サキまで流れにのって、自分の猫型小獣を引き合いに出してくる始末。」

ところがこちらは、タツクによってストツプが入った。

「駄目だ。ヴァシユカは不安定だから」

「で、でも……」

「それに目立つ。不審物扱いされて撃退されかねないし、身元が判明しても困る」

「………うん」

有無を言わせないタツクの言い分のせいとか、サキは、そうだねと。初めの勢いが嘘のように、あっさり苦笑して引き下がっていた。

「………」

逆に、気に食わなかったのはオレの方だった。

……オレにとつて、用を為さない意味ではどっちも一緒だし。心配される気持ちとしても、どちらも一緒のはずだったし。

「どっちも連れていかない。監視したきゃ勝手にしろよ、撃退されてもかばわねーから」

「なっ……」

乱暴に席を立ち、文句があるなら当分帰らな
いと言い捨てる。ちよつと待てと反論しよう
としたタツクと、呆然としてるサキも置いて、
オレはさっさと下宿を出たのだった。

*

護衛勤務初日の本日。

都市長が常駐する、ウィル都市会館にて。

「君が、彼女の言っていたラストイ君か」
護衛とはその職業柄、一般的には武技テスト
を雇用前にされることが多いんだけども。

「彼女から話はきいているよ。早速今日から、まずは館内の警備強化をお願いする」

オレはSKYの紹介なので、その手の段取りは全て免除らしい。賃金も他の奴より高めで、
どんだけあいつ信頼されてるんだという話だ。

そして今、目の前で大きな机に向かい、淡々と話す四十台半ばの痩せ気味の男が、新しく
ウィルの都市長となった護衛対象だった。

肩までの黒髪をオールバックで一つに束ね
ているが、別段美系でも醜系でもなく、年齢
相応の皺のある顔は無表情で、無難なカーキ
色の背広を着ている、新任の都市長。

「ところでこれは、あらかじめ雇う者全員
に聞いている事だが。君は、私の例の新政策
には、反対か賛成か？」

かなり率直な切り出しに、不本意ながら少し
感心してしまった。護衛を雇うくらいだ、新
政策の受けは悪く、理解されない事は自覚し
てるんだろう。その上であえて話に出し、一
人一人の挙動を自らチェックしてるのか。

「……賛成とは全く言えませんが。オレはこの町には長居しないので、市政に口出しする気はありません」

「そうか。やはり君は、彼女の紹介だけではあって、信頼出来る人物のようだ」

「……………」

この場で適当なお世辞や、あからさまな建前を口にする求職者は、潜入目的とか口先だけの相手だと疑うのは妥当な判断だと思う。

最も、先読みしてそれっぽい事を言っただけのオレをそう評価する辺り、それが建前ならただの陰険だが……何となく本心っぽい気がして、少し複雑なキモチになった。

「……雇用期間は、新政策の法案が通るまでだと伺いましたが」

次の総会で決まるなら一ヶ月後だが、果たしてこんなトンデモ政策が、まともに認められる見込みはあるのか。この男の意識を確認してみたくなった。

「ああ。大体一ヶ月間と考えてもらって差し支えはない」

「……すぐに通るんですか。あの法案は」

「次の年始総会で必ず通るよ。その後は別に、万が一私自身が退陣になろうと、新都市法として改革は根付いていくだろう」

通すよ、ではなく、通るよと言う。その確信ぶりには、嫌な意味での既視感があった。

―必ず真実はここに現われる。私はそれを、ただ待っているだけだ―

そう、あれは……一ヶ月と少し前、裁判官のメリナが、S K Yに護衛以外の仕事を依頼してしまった時の顔つきと同じだ。

メリナもこの新都市長も、表情が少なく、淡々と受け答えをする所はよく似ていた。要するにS K Yの好みなのかもしれない。

それとも、何でも屋としてのS K Yに依頼をするような人間には、根本的に共通するものがあるのかもしれない。

おそらく、新都市長のS K Yへの真の依頼は、「次の総会で新法案が必ず通る」ための、通常だと有り得ないレベルでの後押しじゃないかと思うが……メリナがS K Yに、普通なら知り得ない真実の調査を望んだように。

「随分、あいつ……S K Yを信頼されてるんですね」

「うん？」

オレの中での早々の分析を知る由もなく、新都市長は、反応に困ったような返答をした。

「君も彼女も、どういう関係なのかはわからないが、似ているところがあるね。……何故私がああ政策を考案したのか、君達はどちらも、ほとんど興味がないようだ」

―老いた者や弱った者を、生産的でないならと排除する例の政策。予想通りではあるが、コイツちよつと、めんどくせー奴な予感。

「……尋いた方がいいなら、聴きますが」

「彼女も最初に雇った時、同じことを言ったよ。S K Y君には一応、理由は話してあるが」

……。……あいつにはつまり、既に深入りさせたってことだよな、それ。

「そっちは手遅れ……と」

S K Yは必ず、何でも屋として依頼を受ける時、何らかの「代償」を自ら指定する。

それは正直、魂を売る悪魔との契約に近い。

勿論、特に複雑な指定のない、金銭取引で済む護衛レベルの仕事もあれば、暗殺やら復讐なんて裏稼業もある。

しかしメリナのような、普通では叶えられない願いに対しては、あいつは特殊な代償を必ず指定するのだ。

この新都市長のS K Yへの依頼と、その代償が何なのか、興味はあるけど……今それを尋いたところで、警戒されるだけだろうし。

「……何か御用があれば、控え室か通信機にご連絡を」

それだけ言うと、無表情な男の執務室を後にした。男の名前すらまだきいてなかったけど。

部屋を出てすぐ、ここに来てから渡された通信機に電源を入れた時。オレの退室を待っていたかのように、S K Yがやって来た。

「お疲れ。他の護衛に紹介するよう言われているんだけど、続けていける？」

「お好きに。所詮オレはあんたのオマケだろ」それは勿体無さ過ぎる話だねえ。と、誠意のない顔で笑う女。

「結果を除いて、アイテム造りは自宅の方がやりやすいだろうから、紹介後はラスティ君は基本フリー。頑張って新都市長が安心出来るようなアイテム、開発してあげてね」

ここにこ語るが……本気である新都市長を守るなら、一番の危険、多分こいつだし……。

こいつは、契約した相手が代償を渡さなかったり、何かでこいつとの約束を違えた場合は、容赦なくその命を取り立てるんだから。

契約時にその約束は合意のはずなので、相手の自業自得であるとはいえ。

「何か造るだけで本当にいいのかよ？」

「勿論、控え室で他の護衛と遊んでてもいいけど。鍛えてあげたら喜ばれるんじゃない？」

「……あんたは別に部屋もらつてんのか」

「あたしは都市長の身近で、常に待機。もう一人そういうのがいて交代制だけど、待機場所というなら、都市長のいる所の常に隣室」

残念だけどあまり遊べないねと、不真面目なのか真面目なのか、よくわからない女だった。

「……交代制って、あんたの代わりになるような護衛がいるのか？」

「腕は立つけど、防衛面で言えば不安が残るね。だからこうしてラスティ君に、その穴埋めをお願いしてるわけでした」

実際、こいつがいれば本来は他の護衛なんて、ほとんどいらぬのだ。それくらいこいつは理不尽な能力でもって、どんな依頼でも大体完遂出来る、何でも屋に相応しい存在だった。

「あんたは二十四時間張り付かないのかよ」それが一番確実なのに、要するに護衛だけではない別件の存在が、そこからも感じられる。

「そりゃーね。あたしも休みたいしねえ」
—決してそんな人道的配慮ではないと断言。
……そもそもこいつ凶太いから、護衛をし
てる時でも隙があればちやつかり寝てるし。

S K Yの案内で、館の内部構造の把握と、
一通り同僚となる護衛達への挨拶が済んだ。
見たところほとんどは人間の、武術家や元警
備隊といったところで、S K Yの交代となる
チーフ格の男だけが、わずかに千族の血をひ
いてる可能性があるくらいの印象だった。
最も、本気で強い力の持ち主になると自ら
の存在を隠す術にも長けているので、油断は
出来ないけど。

「……しかし全員、よくやるよな。こんな都
市長をいくら高給で短期間守ったところで、
今後恨みを買うだけじゃないのか」
「それでもという賛成派もいるかもしれない
よ。そういうラステイ君はどうして、彼を守っ
てあげようって思ったのかな？」

話を持ってきたのはこいつのくせして、こう
してあざとく、白々しい事をきいてくる。
「恨みを買う程度のこと……今更だからな。
あんたこそ何で、あの都市長に近付いた？」
「ロコミで向こうから依頼してきたんだよ。
断る理由は別にないしね」

スタート地点の執務室前まで戻ってきた。隣
室から最初に挨拶した交代制の相手、チーフ
格の四十台男、通称バンさんが顔を出す。
「あら、お帰り、スっちゃん。アタシちょっ
と眠いから、今日は早めに代わってもらって
もいーい？」
「どうぞ。新入りさんの案内は終わりました
から」

「良かったあ、スっちゃんはいいコよねえ」
……巨斧を軽々と背負って、筋肉ムキムキの
いかつい容姿とは裏腹におねえ口調の男は、
オレを見てふふふとキモチワルク笑った。
「お邪魔してごめんねえ、ラっちゃん」
「……………」

完全にタツク以上に暑苦しく粘っこい存在だ
と、否応なく悟ったオレは、なるべく関わら
ない方針で踵を返した。

「あ、ラステイ君。基本は一日二回以上、特
に正午と零時の定時報告には、顔を出してね」
「……………わかってる」

今日の正午の分は終わっているため、遠慮な
く館を後にしたオレなのだったが。
「……………お邪魔って、どーいう意味だ」
今更気がついたツツコミ部分に。もやもやし
た思いを抱えながらの足取りになった。

*

眠り続ける女性が横たわる、静かな白い建
物の横を通り。自然とそこで足が止まった。
—私はただ、全ての冤罪を防ぎたいだけだ—
少なくとも、自分が関わる事例においては
……そう言って、供述の取れない被疑者を、
何人も無罪としてしまった新任裁判官がいた。

「何ていうかな……やること、極端なんだよ」

淡々と物憂げだった、その声を思い出した。

—そなた、家族の者はいないのか？—

—そうか、天涯孤独か……私も同じだ—

裁判官のメリナは生まれた時に母を亡くし、

たった一人の家族の父は、彼女曰く無実の罪

で捕えられ獄中で病死してしまつたらしい。

メリナの嘆きはやがて、決意に変わる。

—証拠など偽装出来ると、その時に知つた。

父は最後まで無実を訴え続けたが、誰一人聞

く耳を持つてくれなかつた—

だから。百人の有罪を見逃すことになつても、

一人でもいいから冤罪を救いたいと。

「……無茶苦茶だつて、わかつてたくせにな」

そのやり方はやがて、不安と反発を呼び、被

害者の身内から刃を向けられる事まである程、

メリナ自身を追い詰めていった。

そんな時に偶々、裁判所の裏手の路地で倒

れたオレをメリナが見つけた、ウェイドと共に

介抱してくれたのが最初だった。

—あの人はねえ……そのためだけに裁判官に

なつたつてくらい、信念の強い人だからね。

だから余計に、心配なだけで……—

ウェイド検察官から見ればどう見ても、自供

がないだけの有罪者が何人も無罪とされてい

く。勿論、疑われた罪の大きさによつては、

監視がついた上で釈放という形が多かつたに

せよ、その人件費も馬鹿にはならないはずだ。

確実にメリナも段々と、弱気になつてきて

いた最中に。裁判官になつてからずっと雇つ

ていたSKYという護衛が、実は何でも屋と

いう仕事をしていることに気付いてしまった。

—……左肩……—

——

メリナ達に出会う直前、オレが倒れた時。

「……あの日は確か、雨が降つてたっけ……

ずっとポツポツだったけど……」

タツクとアホな言い合いをして、路地裏で

頭を冷やしてた時に、すれ違った黒い傘。

——……いたいの……？——

すれ違いざまに突然、そんな事を呟かれ。

振り返ると、立ち止まっていた黒い女が、

振り返ると、立ち止まっていた黒い女が、

——いい加減お姉さん、解放してあげたら？——

何も悪意のないような笑顔で……そんな事

をあまりにあつさり、口にするから。

——待てよ……！——

女の傘を持つ手を掴んで、どういう意味だと

呻いて詰め寄り、細い体を壁に押し付けた。

——そばにいてほしいこと、気付いてない？——

オレの剣幕に全く動揺することもなく、無

機質な漆黒の目で、ヒトの瞳孔を貫いていき。

このシスコンと、そうして笑つた。左肩に強

い不快感がきたのは、そのすぐ後のことだ。

「……あの言葉の……意味はやっぱり……」

―姉貴の魂を、束縛しているのはオレだと。……一人ぼっちになってしまふのが嫌で、自分の身体を犠牲にしても、魂だけでも。

「……全部、オレの自業自得だつて……あいつは言いたかったのか？」

……あの時の笑顔は今も何度も、頭の何処かを、何かにつけてかすめていた。

オレはずっと……全く触れ合えなくても、姉貴の存在は確かに、感じてはいたけど。

それがこの左肩からとは、友達悪魔のおっさんに言われるまでは気付いていなかった。

―その出来ない命、大切に使うがいい―

この左肩の傷を作った元凶……姉貴の魂をオレに埋め込んだ、通り魔のような謎の悪魔にその時言われた言葉も、未だに意味がわからないままで。

……何か、色んな事を考え出したせいで、ぐるぐるとしてきた。要するにだな。

S K Yの奴は何か知らないが、初対面なのにオレの左肩の傷痕の存在や、何やら深入りしまくった内容を言っけやがるよーな、悟り能力の持ち主であり。

メリナはそれに気がつき、何でも屋としてのS K Yに、ある依頼を託してしまったのだ。

―教えてくれ、S K Y……私が無罪にした者達の中に、真に冤罪の者はいたのか？―

弱気になっていたメリナのその依頼に対し、「その真実を知りたければ、メリナ様……」

それ以外の些事については、一生知らずにいるという「代償」をお約束いただけますか？それが何でも屋の条件だった。メリナはそれを承諾し、結果、辛い真実を知ることになる。

「……一人だけ、冤罪だった者がいます」

S K Yからその後、調査の結果メリナに何を伝えたのか、無理ムリ聞き出した話によると。

「ただ、本来の罪より軽い罪に問われ、本来の人殺しについては未だ明かさず、無罪として釈放になったことで、今も新たな罪を犯す機会をうかがっています」

猟奇的な殺人を犯した者が、別件の冤罪で連行されていた。……それ以外に冤罪、つまり無実の者はいないと、S K Yからはつきりと伝えられたメリナは、その場で昏倒し。隣室にいたウェイドが病院に運んだはいいものの。熱に浮かされ、うわ言のように罪人……と繰り返す彼女に、ウェイドが知らず、S K Yにとつての「一生知らずにもらう些事」を伝えてしまったのだ。

「メリナ裁判官……あなたが無罪にした者達の中には、たとえ有罪であったとしても。その奇跡に改心したのか必死に、人のために生きるようになった者もいるんですよ……」

……その「些事」は、メリナが望んだ真実とは違う現実。だからSKYは伝えなかったし、代償としての価値も、わかってたんだらう。

―残念だけど、ラスト。

あたし、メリナ様を殺さなくちやいけなくなつたよ、と。

メリナが運ばれた病院の裏で、二人で話をしていた時、突然あいつは淡々とそう言った。

―何言ってるんだ、あんた……!?!―

ちようど、ウェイドが言ってしまった時刻と重なつたのが後からわかつたわけだけど。

「んな事、させるわけにいかねーしさ……」

あいつを止めるために、その場で久々のプチ戦闘までする羽目になつてしまった。

「……結果は、惨敗、だけど」

その頃は辛うじて左手も動いていたのに、あいつには何か、オレへの言葉やメリナの依頼調査、ウェイドが伝えた事の感知もそうだが、「わかつてしまう」能力があるようだった。

「だからって、オレからの攻撃は先読み全回避、あいつからはクリティカル連発って……」

……本っ当、プライド総崩れの武器戦だった。

メリナの元に駆けつけたサキやタツクが、オレの弱る気配に気付いて、心配して探しに来た程だ。

……その戦闘中に。何の因果か、メリナは突然、記憶を全て失つて昏睡へ。

記憶が失われたということは、ウェイドが伝えた些事も消えたということ、SKYは妥協してくれたのだった。

……でも多分、次に目が覚めた時。メリナ様は本当に、別人になつていると思うよ―

それだけ言い残すと、二度とメリナに会おうとすることはなく……しばらくSKYの存在は、そこから消えてしまったのだった。

……それが、本当。一週間前、戻つてきたと思つたらこれだ。

「まあ、でも……自覚める可能性はあるって事だよな、それ」

病院建物の、白く色褪せた壁を気楽に見返す。

ウェイドに昨夜の役人の顛末報告をしようかとも思ったが、残念ながら左肩が少し痛み出してきたため、路地裏に入つて座り込むしかない不甲斐ないオレだった。

……どうした? そんなに震えて……―

……あの時もこうして、左肩をおさえて座り込んでいたオレに。メリナは無表情のまま、躊躇いなく小さな細い手を差し伸べてきた。

「……………」

あの日とは違って、よく晴れたウィルの、雲一つない青い空を見上げ。

くらりとはしながらも、立ち上がつて砂を払い、来た道から少しだけ進路を変えて……頭上を一瞬通り過ぎていった、お節介な鳥の気配を感じながら、白い建物を後にした。

*

「……あれえ？ ラステイ？」

ウィルから少しだけ離れた森にある広場で、先客だったサキが、不思議そうな声をあげた。

「ここで見るの、ほんと久しぶりだね。……」

あれ、お仕事は？ 今日からじゃなかった？」

「現在進行形で職務中。……だから来たんだよ」

サキの足元にまとわりつく猫型小獣が、広場にある切り株に座ったオレの方へ、トテトテとよつてきて足元にすりよる。

「……今日は、タツクは来てないのか」

「うん。でもサイゾウは来たり、ラステイの方へいったりしてるよ」

オレとサキが揃うと、鷹と鳥を混ぜたような怪鳥才蔵の気配は場から完全に消えていった。

「あ、安心して帰ったみたい」

おとーさん本当、心配性だよねと笑う。

「……マイペースな奴」

サキの笑顔もどうしてか少しむかついて、不機嫌に座ってるオレの前で、サキは構わず自分のことを続けた。

今朝から早速持ち出してるらしい、自分の身長より長い双鎌を、刃がむき出しのまま両手で構える。その場から大きくは動かず、腰の向きで位置を調整しながら、くるくると左右に素早く、長柄を何度も振り回していた。小さな体ギリギリに何度も刃がそばを掠める。

人間なら卒倒ものの危険さだが、オレ達はこれが当たり前で育ってきている。

サキの戦闘手段は本来、タツク仕込みの徒手空拳だが、こうやって長物を一緒に使うと、

さながら棍術のような滑らかな動きだった。

……あくまで。その棒が鼓棒ではなく、あ

まつさえ両端に刃のついた大鎌でなければ。

「……いくら同じ長物でも、無理があるだろ」
一通り振り回して満足したのか、えへへと笑いながら、サキはこちらの方へやってきた。

「やっぱり刃がついてると、全然違うねえ。」

ラステイはコレ、どうやって使ってたの？」

「……双鎌は本来、対物じゃなくて対能力用だから、大枠としては間違っていないけどな」

オレ製の特別な武器として、この大鎌の唯一の売り所は、物理的にだけでなく「力」にも切れ味を示すところがあった。刀身に霊力や魔力を込めることで、実体のないものにも干渉が可能となり、魔法とかでも相殺出来る。

それでもやっぱり、鎌を棍として使い、刃の背で相手の頭を殴りかねないこの使い方は、どう考えても邪道……つか反則ものだろう。

「ヴァシユカに間違つて当てるなよ、まじでダメージ受けるから」

「そうなんだ……ヴァシユカでも切れちやうのかあ。やっぱりラステイの武器は凄いな」

わたしもほしいなあ、珍しくサキが希望をひよっこり呟いた。

「……いいぜ。暇があつたら今度造つてやる」

「ほんとに？ やったあ！」

一年程ディアルスを留守にしていたタツクが、ひよつこり帰ってきた時のことだ。

突然十歳くらいのサキを連れての帰国であり、旧メンバーの誰もが、降って湧いたサキの存在に驚いたものだった。

—アホかい、俺の子供なわけがあるかい！ どう見たって年齢合わんやろーが！—

その頃タツクは、二十台に入ったばかりだ。確かに有り得ない話ではあるが、サキは確実に霊獣族の血をひいており。

霊獣族は八年前、タツクと他数人を残して滅んでいたのだが、生き残りがいたわけでもない頑強に言い張るタツクに、メンバーは全員首を傾げるばかりだった。

……その後にサキのいない所で、はぐれ霊獣族少女の、出生の秘密を告げられるまでは。

—あいつな……俺らの仲間を殺した仇悪魔が造ってた、殺された仲間のクローンやねん—

その説明口調な告白の内容には、正直オレも、返す言葉が見つからなかった。

その悪魔は実は、霊法種族を滅ぼしオレの姉貴を殺した仇の悪魔でもある。姉貴の魂をオレに移した通り魔の悪魔とはまた別で、ややこしいが、悪魔同士顔見知りではあった。

悪魔に復讐の機会を窺っていたタツクは、偶然、サキの存在を知ることになったようだ。

—多分、兵の一人として使うつもりやったんやろうな。あんまりやから助け出したけど、その後勝手に、悪魔の方が滅んでしもてな—
—それで……あのコを育ててきたのか？—
—既に結構育つとつたし、別に自分が親とか大層な事は考えてへん。これからはみんな、よろしく頼むわ—

クローンという不自然な存在であるせいか、サキの霊獣族としての力は不安定かもしれないと言いつつ、タツクは半ば、旧メンバーに丸投げしてきた状態だった。だからなのか口調も、サキには標準語のままだった。

……来たばかりの頃のサキは滅多に喋らず、たまに笑顔はみせるものの、タツク以外の奴にはほとんどよりつこうとしなかった。

—オレ達のこと、怖がってるんじゃないやねエ？—
それを危惧してか、タツクはあえてサキに冷たくあたるようになり。追い詰められたサキはある日突然、ヴァシユカを暴発させた上、何処かに隠れてしまったことがあった。

—いたいた。探したぜ、暴れ者のお嬢さん—
国境警備隊長をしていた関係か、ディアルスの国内事情に詳しくなっていたオレは、一番先にサキを見つけ出した。

暗い無人の城の地下で、膝を抱えてうずくまっていたサキは。初めは怯えた表情でオレを見上げていたが、しゃがんで視線を合わせ、頭を撫でながらしばらくオレが黙っていると、段々じわりと、両目に涙を浮かべ出した。
—怒らないから。何か言いたい事があるなら、おにーさんに言ってみな？—

……言っておくけど、これは確実に、その時のオレが満面笑顔で言った台詞だ。

オレも昔は明るかったの。逆にサキは、今からは考えられないくらい大人しかった。

——……お父さん……——

幼いサキは、それだけ何とかはつきり言葉にすると。後はオレの袖に両手でしがみついで、ごめんなさいとだけ、かすれきった声で繰り返していた。

……何でこいつが謝る必要があるんだと、その後オレは、サキを連れ戻してからタツクに詰め寄っている。

——あいつはタツクしか頼れる奴はいねーんだから、もっと優しくしてやれよな——

——それがいかんのや！ 俺以外にも懐いてもらわな、今後あいつが困るやろーが——
——だからってサキにだけ普通語とか、あいつが傷ついたって当然のことだろ！——

——そういうわけにはいかん！ こんな口調……あいつにうつつたらどないすんねん——

「……アホ過ぎるだろ、その拘り」

タツクはああ見えて、物凄く頑固だ。

そして自分の中途半端な訛りが好きではな

いらしく、そーいった奴なりの妙な苦悩が、ややこしい事態を生んでしまったようだ。

結局、この件をきっかけにサキがオレ達に打ち解けるようになったので、口調の問題は解消されないまま今日まで来たわけだが……。

後にきいた話。あの時のサキは、一年間ついできたタツクが、オレ達相手に楽しそうに、自分に対するものとは違う口調で喋っているのを見て、自分がずっとタツクの重荷になっていたのだと思ひ詰めたらしい。

「……それで、ごめんなさい、かよ」

「——？ どうしたの、ラストイ？」

「……別に」

タツクは何故か、サキの父親扱いもされたくないらしく、その理由についても絶対に話そうとはしない。それでも別に、サキを大事に思っていないわけではなく、要するに理解不能な動きを続けているわけだった。

「……いーけどさ。オマエ、もうちょつと、食欲になつたらどうなんだよ」

「——へ？」

急に話をふられたサキが目をぱちくりとする。「ハングリー精神が足りてねーんだ。だから本性も自覚出来ないんじゃない？」

「……？」と首を傾げるサキに、立ち上がってオレは、手持ちのダガーを逆手に構えた。

来いよとだけ言うと、サキは即座に、その意味を理解しようだった。

「ラストイが稽古してくれるの、久しぶり！」嬉しそうに双鎌を前向きに構えると。派手に跳躍し、上段から振りかかってきた。

……七分の一の戦力予想とはいえ、武器の選択が良かったのか。初めてにしては筋が良いサキの双鎌相手も、ダガーだけであしらう事が出来た。……足技と回避も使ったけども」

「うーん。やつぱりラスティは強いなあ〜」

「……………この程度で、かよ」

でもこれなら護衛も何とかなりそうだなと、ぼつりと呟いたオレに気付くと。へばつていたサキは双鎌を置いてむくりと起き上がった。

「……………そっか。ラスティくらい強くつても、不安になっちゃうこともあるんだね」

だから修行に来たんだね、と。何も答えないオレを気にせず、一人で勝手に納得していた。

「ねえ、ラスティ……………ラスティの左手はもう、ずっと動かないの？」

オレ以上にシリアスな目をしてるくせ、空気が重くなり過ぎないよう、苦笑にとどめた表情でそう尋ねてくる。

「……………本気で何とかしようと思えば、義手でも装具でも、造ることは出来る」

「……………そうだよ。……………でもきつとラスティは、そういうの、嫌なんだよね」

「……………つか、めんどくせーし」

実際、片手を失くした仲間に義手を進呈したこともあるし、神経に直接届く装具を造れば、騙し騙し左手を使うことも出来なくはない。

「色々限界つてもんもあるんだよ」

基本その手のアイテムは、一度取り付けてしまえば取り外すのが難しくなる。神経に結合出来る精度を誇る代わりに、取り外す時は切断に似たダメージをまた受けるからだ。

「……………このまま弱るなら弱るで、それがオレの運命だろーしな」

「そうかなあ……………ラスティ、いつも冷静だね」

一年と少し前に、オレがディアルスを後にしたきっかけ……………魔物と戦い傷付いた部下に、得意だった精霊の、癒しの力を使ってやれなかった時、オレは自分に見切りをつけていた。

悪あがきをするつもりは元々なかった。その四ヶ月後、サキとタツクに見つかった後も。

「おはよう、ラスティ。朝ご飯出来てるよー」

こいつらはオレを心配してかディアルスを出て、ある朝突然、当たり前前のようにここにいた。追いつ返す気力もなかったオレは、そのまま一年近く同居する羽目になっていたけど。

……………そんな事をうつすら、考えている時。

「……………っ！」

危うく左肩にまた悪寒が走りそうになり、サキが目の前にいた効果か、歯を食い縛って何とかその出現を封じ込めた。

「……………？」

サキはオレの突然の緊張感に、大体の事情は察したようだが。オレが持ち堪える様子を見て、何も言わずにただ隣に座ったままだった。

「……………悪あがき……………か……………」

こうして弱って、段々何も出来なくなること、抗うことは無駄だと思っていたけど……………それは本当に、悪あがきなんだろうか？

沈黙に耐えかねたのか、それとも、左肩のことからオレの気をそらすためなのか。

「……あのね、ラストイ」

サキはぼつりと。

「おとーさんね、多分……今は、わたしがおとーさんのそばにいること。嬉しいって、思ってくれてるよ」

だからわたし、大丈夫なんだよと、色んなことを受け入れてしまっている声で言った。

それは一体、本当は誰に向けた言葉だったのか……何でなのかオレはまたムカムカする。

「……サキは、それで満足なのか」

「わたし？」

「オマエは何か、したい事とかほしいもの、ないのかよ。……オレやタツクの面倒みてる暇があったら、本当はもつと……」

今日みたいに、些細なことも何でも嬉しそうに、そんな薄幸は正直腹が立つ。

ディアルスでも結局、こいつはずっと馴染み切れないままだったから。

それは多分……こいつが何も、ほとんど自分から求めないからだと思う。周りからしたら、何を考えているかわからないのだ。

「……わたしの……ほしいもの……」

いつも与えられるものを心から喜び、受け入れる。こいつが喜んでること自体は嘘じゃないし、ここでオレやタツクと一緒にいることも、望んでそうしている事なのはわかる。

「もうちょっと我が侂言うようにしないと……自分が何なのか、わからなくなるぜ」

誰かと触れ合いたい気持ちを抑えて抑えて、爆発してしまつて。ついに報われなかった姉貴の姿が重なってしまうせいで、ここまで腹が立つのかもしれない。

——親も兄弟も存在しない身の上は、寂しいに決まっているのに……だから些細な事でも何でも嬉しいんだろうに。

サキは一度だってタツクに、娘だと言ってほしいなんて口にしたことはないのだ。

「……そうだね」

サキは唐突に、うん、と。何かを悟ったような顔でこつくり頷いた。

「わたしのほしいもの、それがわかれば……今よりもっと強くなれる。ヴァシユカだつてきつと、実体化出来る気がする」

そういうことだよ？ と、オレの不機嫌にもめげずに物分り良く微笑むサキを見て。

オレは呆れながらも、そーだよ……とだけ、呟くことしか出来なかった。

「とりあえず、今は……ラストイに生きてほしいな」

「不吉なこと言うなよ」

あははと笑うサキを軽くこづくと。そろそろ日も暮れつつあったので、二人で家まで帰ることにしたオレ達だった。

*

—それから一週間。

都市会館にいる時は度々様子をチェックに来る、鬱陶しい才蔵ニタクを投げダガーでたまに撃退しつつ。大きなトラブルはないまま、時間が過ぎていた。

「……………することねエ」

人間との交流も一々煩わしいので、護衛達の控え室には滅多に顔を出さず、フリー特権を生かしてSKYの待機場所に入り浸っているオレだった。

勿論仕事はちゃんとしながら。

今日も今日とて、この一週間で館に仕込んだ結界用具のメンテナンスと、ついでにサキの鍛錬用に、双鎌の刃部分を鈍くするグレードダウンも片手間にしていた。

これぐらいの作業なら出先でもある程度出来るが、終わってから定時報告までの時間が微妙に余り、武器を隣に座って仮眠をとっているSKYの周辺で、グダグダしている状態が現在にあたる。

ちなみに、SKYのよく使う武器は両端に

硬玉が埋め込まれた長さ六尺程のロッドだが、こいつのスタイルはサキとは違い、どちらかというとと剣術に近い棒術だ。硬玉周辺も少しいじると、鞘のように外れて槍身が現われる。

今の所SKYは、交代時間後はちよくちよく留守にすること以外、大人しく護衛業に徹していた。……その留守が一番、何をしてるか物凄く怪しいのはさて置いて。

あまりにグダグダな状態にも飽きたオレは。

寝てる女を起こして巻き込むことに決めた。

—SKYの第一声は、はい?? の一言。

「あたしの経歴? そんなのききたいの?」

「退屈だからな。何なら依頼扱いでいーから、

テキストな話を、テキストな代償で頼む」

物好きだね……とSKYは、軽く考え込んだ

ような顔をしてから。ぽん、と手を打ち。

「イイこと思いました」

笑顔で、オレの方に振り返った。

「何か一つ、ラステイ君製の武器をくれると

いうなら、それで手をうとうかな」

「人殺しに使わないと約束してくれ」

即答するオレ。

SKYは、ふーん? と意外そうな顔をし、

くれていいんだ? と、不敵に微笑んだ。

「絶対嫌がると思ってたんだけどなあ」

「武器は基本、殺傷するための道具だけどな。

オレは殺さず勝てる性能を常に目指してる。

それが出来る奴には条件次第でくれてやるさ」

そういう意味ではこいつの戦闘力と、約束を

違えないことには、間違いがなかった。

「わかった。ソレではヒトは殺さない」

殺す時は違う武器にするという意味なのは、

勿論わかるが。そればかりはオレにはどう

しようもない事なので、軽くスルーした。

ワガママにもこいつは「武器次第で話を交える」とのたまひ、今手元にあり、こいつもよく目にしていて、双鎌を譲ることにした。

サキには別の武器も造り中だし、オレもガキの頃から愛用してたけど、どうせ今のこの左手じゃ使いこなせねーし。

「あちやく、これをくれてしまったか。それなら相当、しっかり話さないとだねえ」

てんで不誠実に一応喜びを示すと。それでは基本項目からと、SKYは淡々と話し出した。

「生まれは不明。年齢は不明。気がつけば貴族悪魔に引き取られておりまして、それも何処の貴族様だったか、よく覚えておりません」

「……オイ」

不明点多過ぎ。

「マジメにやってんのかよ、その口調」

白い目で睨みをかけるが、SKYは全く何もふざけてないよとコクコク首を縦に振る。

「物心つく前に没落してしましまして、その貴族様。ただ、この体は生物的に生まれたものではない事は、後にわかりましたね」

「……は？」

「培養水槽の中でしたからね、その頃の生活。」

その後、貴族様の没落寸前に名付け親に誘拐されたようで、外の世界に出た訳ですが……」

その誘拐犯から「望む事を為せ」と曖昧な指示で解放され、困り果てたと彼女は語った。

「貴族様の下では、ひたすら毎日、貴族様の指示に従う日々でありました。それが突然、

今後は自分の意思で動けと言われても、そもそも意思って何だ状態だったもので」

全く感慨などなく語るその声に、今もそれは同じじゃないのかと、オレはため息をつく。

「廃人してれば良かったんじゃないの、それ」

「とりあえず生命活動を続けるようには言われたからねえ。これくらいの姿形のイキモノ

らしく、何か仕事をして、日々の糧を得て、社会参加をしていくことになったのです」

やれば出来るもんだねえ、と笑って言った。

造られた千族としての身体スペックが元々それなりだった事と、例の「わかってしまう」

能力で、社会生活も何とか成立したんだろう。

「他にはこれといった特技もなかったんで、

与えられる仕事を何でもこなす内に、何でも屋スタイルに固まったという次第です」

めでたしめでたし……な、わけもなく……。「そういうわけで、あたしには何でも屋以外、する事がないのです」

「……っ……っつまんね……」

「あたしもそう思うよ。もう少し意外性とか持たせての方が、サービスになるのはわかっているんだけど」

「いい……とりあえず色々納得はあったから、それで、もう」

「それで、もう」

「そう言うと思って」

あっさり経歴話を終了したSKYは、そのまま目を閉じて、本来の仕事へ意識を戻した。

「……ったく……」

こいつの人間味なさは、千族というだけではなく、そもそも真つ当な生物ですらないとは、

そういう意味じゃ、サキと近いのかもなと、クローン的な生まれ方に関しては思う。

でも、サキの方は曲がりなりにもイキモノらしい感情を持ち合わせてる分、奇跡的な存在なのかもしれない。

「何処の悪魔も、似たよーな事すんだな……」
この時オレは、特に深くは考えていなかった。

「……なあ」

ある意味当然と言えば当然、このチャンスにきいておきたい事は他にもあった。目を閉じている女にもう一度声をかける。

「双鎌の刀身、今日いじった分、元の性能に戻してやるから。あんたの能力のことについても教えてくれよ」

どうせオレ、聴いても勝てないだろうしと、ふてくされつつ語尾に付け加える。

「……そんなことはないけどね。その条件は魅力的だし、同僚に伝えておくのは仕事上は有益だよな」

今後、双鎌を返せと言ったら殺すけど。と、にこやかにSKYは再び話し出した。

「能力というか……あたしの特記事項かな？」

この世界を1つのゲームに見立てるなら、攻略本を持つてるといったところでしょーか」

「……何だその最初から重大問題発言」

「あくまで限定された「今」ってページしか見られないけど。自分や相手の能力値、それらがおかれた状況、課題。そして攻略法がわかってるので、その通りに動いてるだけ」
ただし凄く、情報としては「何となくわかる」程度で大雑把だけどね、と付け加えた。

「というわけで。何でも出来ると言えば出来るし、何も出来ないと言えば出来ない」
何事も、やり方や状況がわかる能力ではあるが、それ自体が「何かを為す能力」ではない。

「それで、何でも屋かよ……」

何でも屋なんて本来、「何でもお手伝いします」の範疇に過ぎないのに、こいつにかかるのと「何でも出来ず」になってしまうのか。

オレも大体「何でも造れます」が、請負い出すときりがなく、武器、道具に限定はする。

薬や結界とか他の分野は要するに、勉強と

製作者の適性次第だ。オレの場合、契約してる「泉の精霊」が、癒し・浄化・育みを司るため、そこからの応用が効いてのことだった。

「ラステイ君みたいな精霊こそ、調法次第で万能薬みたいなものなんだろうね」

「オレはそのレシピは、探求しなきゃわかんねーけど、あんたはレシピと手腕だけ持つてるって事だろ」

ズルイよな、正味それって。

こいつは材料は持つていないが、それさえその都度集めれば良く、オレは材料を持ちながら使いこなせず、腐らせてる感じだろう。

「ったく……それじゃ本当、弱点無しってわけかよ」

「そんな事ないよ？ 腕だって自分で鍛えなきゃだし、出来ない事は出来ないしわかるだけだし。わかることの範囲も限られるし」

現に「今」でないこと、自身の「過去」などについては不明点が多いのも、それだという。

「戦闘にしたって、力量差自体は覆せないから。この体の仕様にも限界があるし……」

ラストイ君が本調子なら、いい勝負だよと。

大したフォローにもならない事を、SKYが口にした瞬間……突然館内に、けたたましい警報が鳴り響いた。

「……お♪」

この音量の警報は、千族レベルの力を持つ侵入者があった時に鳴るように設定している。SKYは早速とばかりに双鎌を手に取ると、

「調整は後でいいから、使わせてもらおうよ」

刃の鈍った武器を手に、部屋を出ていった。

「……」

新都市長はその護衛達に対し、来襲者があったとしても、殺してはいけないという条件を課していた。あんなぶつ飛んだ政策をたてるわりには、たとえ自身の命を狙う者でも、人命を尊重するというチグハグっぷりだ。

「……大丈夫なのは、わかってるけど」

これまでの小物の脅迫や悪戯とは違い、実際の侵入であり、そして千族レベル。力を全く隠せていないところは低レベルだが……。

「SKYはともかく、人間には荷が重い」
そう考えて部屋を後にしたオレが、前線に向かうと、予想通り何人かの護衛が軽い怪我をして後退していた。

その廊下の先にSKYとバンさんが並び立ち、疾風を纏った侵入者に相対している。

「バンさん、どうします？ 良ければあたしやりませうけど？」

「スつちゃんの長物だと死んじゃいそーよ。」

「ここはアタシが、リーダーらしくズバンよ！」
いやいや。どう見ても刃の鈍ってる双鎌と、

巨斧の殺傷力なら、後者のが上たる……。

「……」

真昼間の侵入者は当たると切れそうな風の中で、素性隠しか全身に布を纏い、袖口から出した両手に手斧を構えている。斧使いということもあつてのバンさんのやる気らしい。

「さてと」

バンさんは巨斧を、よいせと下手に構えると。

「くうらあああてめえええあ人様んちでなに刃物振り回してんじゃあああああ！」

—あんたが言うな……！

誰もがそのツツコミを叫びたくなる程、巨斧を大きく振り上げたバンさんは、壁にかけてある大きな絵を、額ごと吹き飛ばした。

「がっ……！？」

侵入者は高そうな絵を遠慮なく両手の斧で叩き斬ったが、見かけによらず素早いバンさんが、絵によって作られた死角を利用して侵入者の頭上に跳び、両手拳骨を叩き落した。

そして倒れた侵入者の背中に着地すると、

風は収まり。勝負はあっさりと決していた。

「もおーう、だめよオーおイタしたら！」
……何っーか。この男には負けたくない、この場にいる誰もがそう呟いたような気がした。

「くそッ……この人でなしがッッ！」

バンさんという巨漢の下、あの打撃をくらっても意識を保つ丈夫さや風の力は、何らかの千族由来だろう。別に興味はないけど、侵入者の方はオレ達全員に、鋭い眼を向けていた。

「何であんな殺人者をかばう、貴様ら……！」

「誰であれ襲うのはいけない事よ。まだ喋れるなんて、あなたこそほんとにニンゲーン？」
背中から床に頭を押し付ける。それでも侵入者は呪詛のような掠れた声で先を続けた。

「貴様らのせいで親父は死んだんだ……！！
殺してやる……貴様ら全員、まとめて殺してやる……！！」

「……あらあら、あら」

侵入者を押さえつけるバンさんの手が、わずかに緩む。侵入者は尚更じたばた暴れ出した。

「へえ。お父さん、昨日、亡くなったんだ」
いつの間にかバンさんの目前、侵入者の顔を見下ろすようにSKYがしがみこんでいた。

「しかも自害かあ。今後、君達の足手まといになるくらいならって、早まつちやっただんだ」

「きッ……貴様あッ！」

「スっちゃん……」

他の護衛達はこの状況に戸惑ったようだが、バンさんはSKYのそうした物言いに免疫があるのか、憂い気な表情で彼女を見ていた。

「それは要するに、例の政策が公布されたから？ お父さんは現在病気か何かで、社会復帰の見込みがなかった？」

「黙れ！ 親父を侮辱するな、人殺し！」

「ふーん……」

ふん、ふんと、侵入者をじーっと見つめ。

「だから、何？ と、笑って問いかけた。」

「それって……悪いのは都市長なのかな？」

「な……」

「まだ新法の予告があっただけで、実際に採決されたわけでもない。法の内容もあくまで現時点では選択制。嘘八百でも社会復帰見込書を提出さえすれば、当座はしのげる」

……SKYの言う通り、新たなトンデモ政策の細かい内容は、「生産的活動を行わない有識者は今後の社会復帰見込みについて身上書を提出せよ。これを拒み社会参加を拒否し続ける有識者には、安楽なる眠りの選択肢も用意される」という、病人や老人がすぐさま、殺されるようなものではない。

けれど、そんな事をわざわざしなければ、安楽死しないかなんて促されるような所では、オレでもバカバカしくなるだろうと思う。

「そもそも、別に自分で死なずとも、法の執行を待てば安楽死させてもらえただろうに。
—お父さんに出来る事は色々あっただろうに。どうして違うやり方を選ばなかったのかな」

「黙れ……！！ 黙れえ……！！」

お父さん、死ぬ理由、前から探してなかった？
そう笑うSKYを、やがてバンさんが黙って手の平を向け、制止した。侵入者はバンさんの巨体の下で、いつの間にか暴れ止まり、ぴくりとも動かなくなっていたのだった。

*

……ほんつとーに、あいつ、性格最悪。

定時報告が終り、侵入者の件と今後の防護策強化について、都市長自身が身に付けられるアイテムの開発を依頼されたオレは、都市長の体のサイズを測るため、執務室の前まで来ていた。

定時報告でのSKYの言い草を思い出す。

—ああいったタイプは今後増えると思われますので、皆様も身辺には十分ご注意下さい—
はっきり言えば、今日の侵入者の件は、悪いのは八割方都市長だとオレは思ってる。

個々の状況がどんなものであれ、たとえそれぞれに死にたがってる奴らがいたとしても、最後に背中を押したのは確かに都市長なのだ。
SKYだって多分わかってるのに、護衛達を正当化するため、場を煽っただけだろう。

—それでも、どんな理由でもね。人を襲って

殺そうとするのは、間違ってることなのよ—
だから都市長、守ってあげなきゃねなんて、同じ正当化でもバンさんの方がマトモに見えてしまうのが、何だかすげー複雑だ。

「だからね。こうやって追い詰めたケースも出てきちゃってる以上、やっぱりの政策、アタシはやめるべきだと思うのよ」

そうそう。ただ潜入してるだけのオレと違って、何であんなおねえ口調の筋肉がまっとうな事を言うのか……—って、え？

「ねえねえ、デンちゃん！ アナタが疲れたヒト達を楽にしてあげたいだけなのはわかるの、でもね、実際は返って追い詰めてるだけなのよお！ ああ……—どう言えばわかってもらえるのかしらあ……—」

執務室のドアの向こうからは、甲高くてよく通るバンさんの声だけが聴こえてきていた。何やら都市長と話してるのはわかるけど……
デンちゃんってやっぱ、都市長なんだろうな。

「……わかったわ。でもね……」

バンさんは段々とドアに近付きながら、都市長に次のような捨て台詞を残していった。

「アタシ達……友達だから。アナタのためにアタシ、最大限の力を尽くすわよお！」

ボタンと、ドアを豪快に開け閉めして出てきたバンさんが、執務室前でポ—然としているオレに気付く。

「あらやだー……ラっちゃん、ひよつとして聴こえてたあ？」

「……はあ。……まあ」

最後らへんをちよつとだけと、ねちこい視線に後ずさりしながら正直に状況を伝えると。

「そっかあ。……アタシとデンちゃんね、元々マブなのよ。こんなことやめさせたくてアタシ、彼に近付いて直接止めようと思って、

この仕事を引き受けたんだけど……—」
こんなこと、他のコには言えないわねえと、うふとオレを見るバンさんに、何でオレなら言えるのか尋く勇氣はなかった御免なさい。

「……スっちゃんのこと」

そうしてバンさんは去り際、黙っていたオレの方を悲しげに見ると、

「止めてあげてねえ、ラっちゃん」

意味深な台詞を残し、待機室に戻っていった。

「……………」

今はバンさんが都市長に張り付く時間で、SKYはまたも留守にしている。

最近、段々と総会の出席者とか、色々情報が明らかになってきていたが。

「反対派の代表、ぱつとしないの多かったな」
もう少し法案を改正するなら通しても良いという勢力が増えつつあり、そのままでも賛成という奴らもわりと見られ、後三週間で、更にどう転ぶかといった感じだ。

「根回ししてるな……あいつ」

基本にして究極の通し方だとは思うが。その根回し方法自体が、マインドコントロールとかそんなレベルなんじゃないかと思う。

「バンさんに触発されたわけじゃねーけど」

オレも少し、都市長と話してみることにした。

都市長のSKYへの依頼は多分、新法案を通すことだと予想はついても……SKY本人の動向についてほとんど進展がない状態は、オレも不本意だし。

一通りまずは、都市長の体のサイズを、何とか不自由な手でも測り終えた。既に一般的な防弾チョッキも着てはいるが、千族対策に魔除け効果とかもあつた方がいいだろう。

「……材料費、また結構かかりますけど」
「構わない、最高のものを使ってくれ。今日のようなことがこの先、増えるだろうからね」
よしっと。思惑通り都市長の方から今日の話振ってきたので、そのまま便乗する。

「これだけ金がかかって、命も狙われる状況で。それでも、新しい法を作りたいんですか」
外周を固めてるような警備隊ではなく、オレ達のような私設の護衛の賃金は全て自費だ。

都市長自身が金持ちでなければこんなやり方は成立しないので、その辺りも一般ピープルの反発を買うと思うが、どうなんだろうか。

「誰に理解されずとも、私は構わないのだ。一つの試みを歴史に残すことは出来るだろう……ここで命を狙われる程なら、尚更だ」

「そう仰つても、理解者は増えてきてるじゃないですか。大したもんですね」

「それは私だけの力ではない。私自身は特に偉大でも何でもない人間だ……この特筆すべき新政策も、そもそもは私の立案ではない……ちよつと待てオイ。謙虚さの使い所とか色々間違つてるけど、最後のはさすがに、問題多過ぎる発言じゃねーのか。」

「それはつまり……協力者以上の存在、ブレインがあなたにはついてるってわけですか」
一個の政治家として、というより一人の大人としてどうなんだそれ。都市長自身が例えばSKYの、操り人形だとも言わんばかりだ。
「今日はよく話をするね、ラストイ君」

予想していた言葉がここで返ってきたので、オレは又ケ又ケと、用意していた返答をする。

「クライアントの意向を把握しておくことは最低限の務めなので」

無難な内容に、そうかね。と、特に不審も感銘もなく受け流す都市長。

「ブレインなどという程大げさなものではないよ。これは……私の母の望みを、私なりに叶えて差し上げようとした結果だ」

「……………はい？」

……意外？ な方向に進む話に、初日は特に尋かなかつたが、今はそのまま喋りたそうな都市長に任せることにした。

「母はとても強い人でね。女手一つで私を育てあげ、尚且つ祖父母の介護もやりとげたが、やっと全ての手が離れた途端、不治の難病に侵されてしまった」

いつも無表情で淡々としてるくせに、かなり痛ましい顔と声で話すこの都市長は、どうやら敬愛を越えたマザコンだとみた。

「それでも私の援助を拒否し、弱った体を呪

いながら一人で不自由な生活を続けている。一体何度、こんなくつくつぶしは殺してくれと

いう嘆きの言葉をきいただろうか……」

母のように苦しむ人間は何人もいるのだと、都市長は語る。

「その結果死を望み、自ら命を絶つ不幸な人間は増えてきている。彼らを受け止め、安らぎを与えられるシステムが何かないものか。当の母に相談した結果が、この政策だ」

幸い、良い協力者も得ることが出来たと語る都市長……どうやら、新政策の内容自体には、

SKYは全く関わっていないようだ。

ただしそれを通す過程は、何でも屋としての彼女に依頼されているはずだった。

「……………」

それでも……そんな経緯で立てられた新たな法は、本当に誰かのためになるのだろうか？

「それって……アンタの母親は本当に、それを望んで待っているのか……？」

——知らず。この男の母親の状況が少し自分と近いせいか、地の口調が出てしまっていた。

「ラスティ君？」

「……命と大金をかける理由が、それで本当に満足ですか。……失礼ながらオレには、あなたに還るメリットが、あまり感じられない」

それは、オレにしては最大限の、自分でも意外な説得の言葉を口にしていたと思う。

自分は市政には口出ししないと、初日にこの男には言っているが。この男個人の心情には、ツツコミたいところが山程あった。

「……………」

都市長にも何か思うところはあったのか。

それともオレの言葉を、共感や心配の内容であると都合良く受け取ったのか、

「……………ありがとう。しかしもう、私は引き返すことは出来ないのだ」

などと、ちよつとイイ顔をして謝意を述べる都市長だった。……ちがうだろ！ とここでツツコミを入れてもおそらく通じない程に。

執務室を出てから待機部屋に戻り、こちらで与えられている工房にある、今揃っている材料と工具を確認する。

この一週間、結局オレはほとんどの時間をこの館で過ごし、ここで依頼されたアイテム開発に必要な物は、あらかじめ新調してもらっていた。

「今足りないもんは……うちにならあるけど」
タツク達の小言よけの面もあるが、こちらで作業していると、暇な時はSKYが手伝ってくれる。オレの左手の状況も把握してるあいつは、流石の攻略本能力で、オレの意図は違わず理解し、素早く的確に手助けしてくれた。

勿論これは、護衛同士としての助け合いなので、オレがあいつに何か代償を支払うことはない。超過勤務としてあいつが都市長に請求するだけのことだ。

「……引き返すことは出来ない、とききたか」
退室前の都市長の言葉を思い出す。

「思い当たることだらけだっつーの……」

SKYの口口を知ってる身としては、まあ。こうしてあらかじめ状況が見えてくると、当然、悩むこととして……この先オレは結局、このまま関わるのか、それとも手をひくのか。

「関わり続けるなら……方針は見えたけど」
……けれど正直、それにはあまり成算がない。

―彼女も当然、このまま眠り続けるなら、安楽死の対象とみなされるんだろうね―
―この人でなしがツツ―

……大した変化なく昏睡を続けるメリナの無味乾燥な寝顔や、おそらく現在行われているだろう、今日の侵入者の父親の、息子不在の葬儀の光景が浮かぶ。

オレは別に、何かをしたいというわけじゃないし……実際何も出来ないような気もする。
……ただ、自分には出来ないし決め付けて何も出来ない事、その居心地は悪過ぎた。

「……少し……様子を見るか」

何も出来なかったとしても、手をひくのはもう少し、必要に迫られてからでいい。

「今はコツコツ、準備するしかないってか……」
……つたく、ガラじゃねーし」

心を決めると、何が必要か考える事にした。
「どの道、機会がなきゃ……全部ムダになるだけだろーけどな」

まあ、この体じゃそんなもんだろーなどと。そうした結論の元。新都市長に急ぎで良質な防具を造ってやるため、ここで足りない物資を当面持参することに決めると。

あまり気は乗らないながらも、久々に下宿へ帰ることにしたオレだった。

*

ちよくちよく才蔵が様子を見に来て、オレの体調は確認してたせいか。タツクとサキは特に何も言わず、帰ってきたオレを出迎えた。

この一週間は、緊張感が強かったせいか、発作が起こる数も時間も普段より少なかった。どうしても時は工房を閉め切つてこもり、SKYには見られることもあったが、大体は何とか一人でそのまま耐え抜き、定時報告が近い時だけ薬を使つて対処していた。

……いつもの薬を使う回数が減つたせいか、発作の強さはともかく、全体的な体調は少し良い。それは二人も感じているようだった。「何かラステイ、仕事始めてから調子良さそうだね」

朝ちゃんと起きれてる？ と、サキは笑顔で着替へと替えのコートを持ってきてくれた。「……誰かさんがいないから定時には起きないけど、目は覚めてる」

「そっか。わたしは久しぶりにおとーさんとずっと二人で、ちよつと新鮮な感じだよ」

「…………へー」
家を空けてる理由でもないけど……オレのいぬ間にこいつらにも何か、変化はあるようだ。

それにしても……何だかサキの、元気がないように思えた。普段ならもつとこういう時には、話をしたがる感じなんだけども……。こいつが元気がない時は大概、体調が悪いか、タツクに何か言われた時なので、タツクの主な居場所である食事部屋まで行き、新聞を広げてる姿をじーつと、白い目をして見つめてはみたものの。

「何やねん、俺の顔に何かついとるんか」何も後ろめたいことはなさそうだった。これでもコイツはいつも、サキにきつい事を言った時は、後で言動を反省してるのだ。

「二人で出張して俺が恋したんか？」
「誰がだ。サキの様子、何か変じゃないか？」

「……そ、そおうかなあ？ 別にいそんなこと、別にあらへんでえ……」

……やっぱりただのアホだ、コイツは。何か隠してることはバレバレなわけだが……この不自然過ぎる反応からすると、自分の意志ではなく、サキが口止めたんだらう。

「……な……何やねん……」
一通りじーつとにらんでも口を割りそうになるので、仕方なく、気になっていた別の方面から話を振ることにした。
「…………ところで、もうすぐサキ、誕生日じゃなかったか」

「あ、ああ、そうやな。もう年末やもんな」オレも先月、二十一歳になったばかりで、その時はサキがタツクと二人で手作りケーキを用意してくれていた。

……誰かに誕生日を祝ってもらうのなんて思えば十年以上なかったかもしれない。サキがしつこく日付をきいてくるので、何かと思えばそれだったのだ。

「オレ今、あいつに武器造つてやってるから。タツクも何か用意しとけよ」

「そうなんか……よつしや、わかった。当日はちゃんと帰つてこいや、ラスト」
「……特に向こうが何もなければ」
あつてもSKYに押し付けようとは思うが。

とりあえず、誕生日なんて呑気な予定も話せる程度なら、今サキに差し迫った事態が起きてるわけじゃないんだろう。

今日のところはそれで引き下がると、自室からいくつか必要な物を持ち出し、着替えも力で圧縮して肩掛け鞆に詰め、下宿を後にしたオレだった。

まっすぐ館へ帰るつもりだったオレを、まるで待ち受けていたかのように。

「……こんな所で何してんだ、あんた」

「うん。散歩がわりに、よつてきてみた」
下宿を出てすぐ向かいの廃ビルで、白い堀に持たれて月を見上げる不審者、S K Yの姿があった。都市長の傍仕えは、六時から正午、十八時から零時までがS K Yのターンなのに。

「交代の時間過ぎてるのに、いいのかよ」

「バンさんがねえ。男の方が体力あるのよ、今日は朝までアタシがやる、スっちゃんもたまには仲間と親交深めてらっしゃい。とさ」

それで他の奴らと普段は別々の夕食を共にとり、その後でこつちにやつて来たらしい。

バンさんのリーダー的心配りはわかるが、オレは日頃からS K Yとは話してるし……。

「オレの方、来る意味あんの？」

そうだけど、とS K Yはくすくすと笑う。

「わざわざあたしと話そうとするのなんて、ラストくらいだなあつて思つて」

ラストは、いやだった？

その呼び名の不意打ちと、その後の沈黙……更に月光を背にした微笑みはヒキョーだ。

「……オレには別に、話なんてねーけど」

せめてもの抵抗か、館に向かつて歩き出した
はいいものの。後ろ手を組んでひよこつと隣に
来た姿に、一瞬、誰かの面影がよぎった。

「え」

「？」

S K Yはにつこり笑つて、オレの顔を斜め下から覗き込む。その微笑みからしばらく目が離せず、またオレは立ち止まってしまった。

「何考えてるの、ラスト」

……仕事の一貫として今回オレに関わつて、オレを呼ぶ時はラストイ君なんて言つてたこと
いつだったけど。

そう言えばこいつがメリナの護衛をしていた頃は、何処でオレの昔の通称を知つたのか、
こう呼ばれることの方が多かった気がする。

「……当ててみるよ？ 基本わかるんだろ、
そういうの」

シンプルに整い過ぎて、見飽きることはない
透明な顔立ちから、ようやくふいっと目をそ
らすと、オレはさつさと歩みを進めた。

「もうちよつと近付かせてくれないと、細かい
ことはわからないかな。……とりあえず、
夜の散歩に付き合ってくれるのはわかる」

「……」

傍仕え以外の時間は多分、根回しに奔走して
いるだろうS K Yは、どうやら久しぶりに完
全フリーな、不意打ちのために予定のない時
間という感じだった。

「さっきの所でどのくらい待ってたんだ、あんた」

「そんなに。用事は他にもあったしね」

月明かりの中を適当に郊外を歩きながら、どうでもいい話を、思いついた時だけ口にする。

こいつという時間をわかりやすく言うなら、ひたすら「楽」の一字に限る。あやしい奴だし気は抜かないけど、気を使う必要は全くなかった。使ったところで見透かされるけど、無意識にわかったのかもしれない。「バンさんの気紛れにわざわざ付き合わずに、帰って寝たら良かったんじゃないのか」

「そういうわけにもいかないでしょう。更に面倒くさい事になるのがわかりきってる」それは批難でも悪口でもなく、ただどうでもいい状況を説明されただけだった。

……こいつは元々、誰にも何も期待しないから、誰かに何かを強く思う事がない。

仕事以外でこいつが誰の心に残る事もない。

それがオレには、何より居心地が良かった。

こいつはきつと、オレが今ここで死んでも、残念だったねと笑って見届けてくれそうだし。

それでも今晩ここまでできたのは、「他に話すヒトがない」と。言葉通り、今回の仕事の中では対処に困り、オレを選んだんだろう。

「……らしくねーけど」スマートな人選と言えばスマートだ。

……基本オレには、この仕事に誘われる前から、こいつを拒む想いはなかったんだから。

ヒトの隣を静かに同じペースで歩く、黒くて長い髪の女の横顔を流し見る。

「あんたさ……昼間、自分は世界の攻略本を持つてみたいなこと、言ってたよな」

オレがこれだけ気楽になれるのは、多分、「それってつまり、その気になれば、オレを攻略することも出来るってわけ？」

それもいーな。なんて感じる自分の心を隠す必要や、意味がないからなのかもしれない。

隠さず不敵に尋ねるオレに、彼女は微笑む。

「何それ。ラストはあたしに攻略されたいの？」

「既に狙ってやってるんじゃないの。上目遣いとか、後ろ手の組み方とか」

「へー……ラスト、そういうのが好きなんだ」違うし。と笑い返したところで、自分が本当に久々に笑っていた事に、後から気が付いた。

「……なあ、あんた。今回の仕事が終わったら、その後はどうすんだ？」

「全然全く、何も決まってるし考えてない」仕事はいつも風任せだからねえと、他人事のようにSKYは呟く。

「大体、まだ始まったばかりだしねえ」「あつという間だけ、一ヶ月なんて」

「そうかな？ ……ラストと仕事してたこの一週間は……あたしにはとても、長かったよ」

それを口にした時のSKYは、不意にオレの目を見て、特に笑うこともなく。ずっと……と、何かを言いかけて。

「……—！」

……と、()で。

突然SKYが、ぴたりと足を止めた。……
何気に雰囲気良かったかもしれないのに。

オレも合わせて立ち止まると、隣で立ち尽くす彼女の視線の先……体の大きい黒い猫が、オレ達二人を射抜くような光る目で見ていた。

「……あ………」

SKYは半ば、ぼかーんと放心しながら、突然現われた黒い猫を見つめる。

—何か見た目は、ヴァシユカっぽいけど。

色の異は奴らには重要なので、猫違いだろう。

まあ、ヴァシユカニサキにこういう二人連れを見られたら、後で何を言われるかだし、猫違いの方がいいかと考えてるオレの横で。

「……おまえ……？」

ぼけー……と呟くSKYの左頬を。何故か一筋の涙が、つー……と伝って流れ落ちていた。

「……？」

有り得ない事態に絶句のオレを格別気にせず、

「あれまあ」

SKYは自分でも不思議そうに涙を拭うと、改めて黒い猫の方に向き直っていた。

「……そんな無様な姿で、何がしたいの」

猫相手にもにっこり微笑むSKYは完全に、いつも通りの彼女に戻っており。黒い猫もいつしか、闇の中に姿を消していたのだった。

「……あんたも泣くんだな」

「泣くんだねえ」

自分でも吃驚と全然説得力のない声で言う。

「何だったんだ、アレ」

「何だったんだろうねえ」

これまた誠実さのない声で返答し、教える気はないことをわかりやすくアピールしていた。

まあでも。気になったのは、今の猫より。

「……あのさ」

—さっき、何……と言いかけたオレの口を、細くて白い人差し指で、しーっと防ぐと。

「行こ、ラスト。時間もそんなに、沢山ある

わけじゃないんだし」

そう言うのと再び後ろ手を組んで歩き出した。

「……時間、ねえ」

ふわりと後ろ髪が、心なしか月の光に淡く息づき。オレも残った夜へと誘われるのだった。

*

—それから、オレにとつてはあつという間に三週間の時間が過ぎていった。

「意外に結構、色々あつたな……」

二週目にサキの誕生日を三人で祝ったり。

三週目には昏睡のメリナが目を開け、大慌てなウェイドから通信が入った事があつた。

「ラストイ君！ こないだの匂い薬、あるだけ全部ちようだい！」

メリナはやつと目を開けたはいいが、呼びかけへの反応や喋ること、何かを目で追うことはなく、全体的に焦点が定まらない感じで。

それでもウェイドは大泣きで喜び、通信機越しにひたすらオレに、「生きててくれればいい、生きててくれれば」と繰り返し返していた。

オレの方は、もう少しだけ薬の出力を上げてみるかと、人間向き用量に四苦八苦しつつ、ジオウの根を合わせるといいかもねなんて、思わぬSKYの助言に疑心暗鬼になったり。元はあんたのせいだと悪態で返しつつ、取り入れて自分で毒味してみたところ、意外な好感触に、少し気分が良くなったりもした。

二週目のサキの誕生日に話を戻すと。一応今年で十五歳になったらしいサキは、何となく元気がない様子は続いていたものの、誕生日に帰った時はとにかく嬉しそうだった。「大丈夫、わたし今、ちよつとスランプなだけ。心配せずにラストイはお仕事専念してね」オレ製の携帯可能な変形ロッドに、タツクからは打撃用の両手装着型旋棍。……無骨な品々に全くめげず、早速振り回すサキだった。

……この時、オレは結局、サキに起きていた異変に気付いてやれなかった。

オレが下宿を空けるようになってしばらくして。サキは突然、もう一人の自分なはずのヴァシユカを具現化出来なくなっていたのだ。「せめてなあ……原因がわからないと……」一度ディアルスに帰り千族専門機関に相談するかどうか、タツクはオレには話せず、悩んでいたらしかった。

都市長の身边では、何回か侵入者や小型爆弾テロがあつた感じだ。その都度増える防衛強化依頼にこつこつ応えるオレは、都市長の信任を厚くしつつあつた。……正味、媚びを売るのに近いが、意識してのことでもあり。あの後も度々、バンさんは都市長を説得しようと話していたが、都市長が首を縦に振ることはなかった。それでもバンさんがクビにならないのは、ある意味不思議な話だ。

SKYとは相変わらずで。あの日、色々話した言葉の、続きを聴く機会は全くなくて。

バンさんはSKYにオレの事を、当初から「スっちゃんの彼氏」と言ってたようだが、SKYはわざわざ訂正していないようだった。バンさん相手には説明しても無駄というのはオレもわかるが、実際のところ、SKYが何を考えているかはほとんど見当がつかない。「……どーせ、何も考えてないんだろうな」というのが、オレの見解だったのだが。

あいつが一度だけ見せた謎の涙や、これから起こる出来事の中で。その思いは覆されることになるのを、今は当然、知る由もない。こうして、またたく間に一カ月の時間は過ぎていつて、ついに例の新政策の決議を行う、年始総会の初日が訪れていた。「はい、みんな注目う！」
護衛を一同に集め、バンさんが号令をかける。

「いよいよ今日からカウントダウン開始よ。

これから三日間続く総会の中で、妨害行為が激化するのは必至！ 対応出来ない事態に当たれば、すぐにアタシカスっちゃんまで連絡しなさい！ 決して深追いと無理は禁物！」

総会はこのまま都市会館で行われるが、オレ、SKYを除いた護衛は、バンさんが配置を決めていた。バンさんとSKYは都市長にひたすら張り付くが、オレは二人の補欠らしい。

「……結局、フリーってことか」

この三日間はオレも、例の薬を予防的に少量ずつのむ事になっていたが。久々の荒事に、

「……やべーな。……不謹慎だけど……」

正直。その緊張感に、国境警備隊長をした頃のような高揚が、目を覚ましつつあった。

「……………」

戦闘向きの動き易いコートを羽織る。左肩だけ出すような切込みは仕様で、そこに念のため開発した物も一応取り付ける。使いたくないが、使わないといけない事態は有り得た。

時間が迫り、居室から出た都市長が、バン

さんとSKYを両隣に別館から出てきた。

……オレがその時、都市長の前についたのは、空いた場所を補う護衛感覚だったと思う。

背後は通常の警備隊員がかため、前だけガラ空きのものは、オレ製の結界、見えない強化ガラス的なモノが、移動中は都市長の視野に発生することを関係者は知っていたからだ。

—だから。都市長の前面からの狙撃なら、都市長には通じないことはわかっていたが。

「—！」

半径一キロ以内の火器使用を示す警報が鳴る。被弾したのは都市長ではなく、オレの右頬で。

—って……狙い、オレかよ！？—

「まずっ……………」

二度目の警報。完全な油断に危険過ぎたことを悟った体が凍り付いて動かず、成す術のないオレの前に……黒い影が躊躇なく差して。—血を流して片膝をついたSKYの姿に。

頭が真っ白になると、左肩に激痛が走った。

*

「はあ……今日はいよいよ、あのトンデモ政策をどーにかする会議か……………—って」

うおおあああ！？ と奇声を発するタツクにもかまわず、下宿の二階、開いてたベランダの雨戸から、オレは飛び込んだ。

驚いて思わず構えをとるタツクの前で、ドアを開けられなかった原因、右肩に担いで使える右手をふさいでいた女をベッドに下ろす。

「—タツク！ こいつ、頼んでいいか！？」

「はあ！？ 誰やねんこれ！？」

唐突なオレと知らない女を焦って交互に見る。

「オレは仕事に戻る、こいつがこっちに帰ってこないよう見張っててくれ！」

「なんやてー！？」

どういうことやねんー！ と叫ぶタツクも、女が怪我をしていることは気が付いたようだ。

時間がとにかく惜しかったオレは、

「怪我はいーけど、こいつ危ない奴だから、起きたら多分暴れる。オレが帰るまでオマエが取り押さえてくれ！」

既に都市会館で応急処置はされていて、そこから連れ出したS K Yの監視を頼むと。オレは再び窓から飛び出し、都市会館への道を急いだのだった。

「つて……」
ちよつと待てやあああ！ というタツクの、当然の叫びに悪いとは思いつつも。

今まで待ちに待っていた機会が訪れた状態で、オレは、立ち止まることは出来なかった。

少しだけ時間を遡らせると。

都市長ではなく、オレを狙った銃撃に気付いたS K Yが咄嗟にオレの身代わりになり、オレも発作に襲われたのが二時間前だった。
「ラっちゃんとスっちゃんは救護室へ！
こっちはアタシ一人で十分よ！」

パンさんの迅速な指示の元、都市長は予定通り会議室へ。オレとS K Yは揃って救護室へ

運ばれ、待機していた医者に引き渡された。
「……………何で……………だ？」

医者がS K Yを手当てする間、オレは自分で薬を飲むと、一度状況を頭から考え直した。

「狙撃は想定内……………結界も警報も機能した」
はつきり言って強度・便利さ共に、かなり高レベルの結界だ。都市長の前にいる警護者は、結界の外なることを除いて。

「都市長狙いなら、弾は必ず結界がはじく」
けれど、銃口は最初からオレに向けられていた。結界は都市長とその後ろを守るもので、オレが狙われた事や、弾は当たる事もわかったS K Yは、何故か咄嗟に前に出たんだろう。

「……………前に出ずに、蹴り飛ばしや済むのに」
あいつ何考えてる……………と強い吐き気が襲う。
オレが狙われたのは、都市長への威嚇の一つなのか……………それにしても度が過ぎている。

「……………内通者が……………いる？」

オレが死んでも結界は解けないが、そう思った奴がいてもおかしくない。「わかってしまふ」S K Yがいる手前、疑ってなかったのに。

「終わったよ。これ以上は病院に連れていかないと難しいから、君達で相談してくれ」

医者がオレの方にやってくる、オレの体調は悪くないことを見てとり、S K Yについては簡単に、銃弾は左肺を貫通して肩甲骨で止まり、心臓や大血管の損傷はないと説明した。勿論安静にしなければ危険はなくなはないが。

心配がそこまで弱ってなかったもので、別に明に、オレはふうつと、息をついていた。

「ありがとうございます。今は話せますか」
「出来るとは思うが、あまり無理させないよ。何かあったら壁のボタンを押しなさい」
そう言うと医者は、他にもちらほら運ばれ出した警備隊や護衛の診察に行った。

処置室のカーテンをくぐって中に入ると。

S K Yは白い診察台に横たわりながら、入ってきたオレに気が付いて目を開けた。

「……………」

「……って、おい！」

止める間もなくS K Yは上半身を起こすと、げほつと血液混じりに咳き込んだ。立てた片膝に置いた片腕で、俯く頭を何とか支える。

「会議……始まったんだ……」

空いた片手で胸を押さえ、俯いたまま言った。

会議の最中は、テロでもない限り都市長は安全だろうし、こいつも今は動こうとはしない。

「代わりにあちこちで小競り合いが起きてる。

……大物は移動時を狙ってくるだろうな」

そうだねとだけ答えると、そのままの体勢でしばらく彼女は黙り込んだ。

S K Yの定番、黒い立襟は袖がなく前開き

で、処置時に切り開かれることもなく、今も包帯の上から羽織れていた。これならこのまま連れ出せるなど、変に冷静にオレは考える。

「……………」

熱っぽい体で、細くも荒い息遣いのS K Yだが、顔にはほとんど苦痛を浮かべていない。

「……胸を撃たれてそれだけってのは凄い」

いくら千族でも、当たる所に当たれば死ぬ。

人間より死ぬまで時間はかかるとはいえ。

「でも……………何でよけなかつたんだよ？」

「何でオレをかばったんだよ、とは。」

不覚にも声が震える気がして言えなかった。

「……………」

S K Yはオレの方を見ずに俯いたまま目を開け、少しずつ呼吸を整えながら、

「……よけたら、ラストに、当たる」

そんな事を、抑揚の少ない声で呟いていた。

「……………は？」

啞然とするオレの前で、少しだけ顔を上げる。

「……………どちらかが撃たれて……………それがラスト

だったら……………ラストは死ぬ」

……そう、虚空を見ながら、無自覚な声で

続ける。彼女自身、この状況に対してまだ整理がついていないようにも見えた。

「オレかあんた、どっちかが狙われてたっ

ていうのか」

……それでオレの代わりに、あんたが撃たれることにしたっていうのか。

言葉もなく怒気が一瞬で体を駆け抜ける。

何も答えず俯いていたS K Yは、いつしか、

壁にもたれて意識を失っていたようだった。

「あんた……………」

……こいつは基本的に、仕事の益にならない行動を自らとることはない。自分の身を盾

にするような事でも、それが必要だと判断し

たなら、遠慮なくそうする奴ではある。

「それでも今回は……………どう考えても、判断ミスだろ……………」

不思議な程に、今、するべき事が見えてい

たオレは、この状況を利用するその行動に、

矛盾とわかりながら奇立ちを持って余していた。

「……悪く思うなよ」

そしてその後、意識のないSKYを救護室から担ぎ出したオレは、下宿に急いで彼女をタックに託した。……目的は一つ。

「あいつが邪魔出来ない状態にいる間に。

……都市長のおっさんと話をつける」

ヒト一人運んだくらいで息の上がつている
怠けた体を罵りながら、都市会館までの道を、
全速力で駆け抜けていった。

*

「あら？ ラっちゃん、どうしたの？」

救護室にいないの？ と、会議室の外
で待機中のバンさんは、汗だくのオレを見て
不思議そうな顔をしていた。まさか下宿まで
行って帰ってきた後だとは思わないだろう。

「……会議はまだ、続いているのか」

「ええ、後もう少しで、一旦お昼休憩に入る
と思うけど」

「……………」

「元気になったのはいいけど、スっちゃんの
そばにいないの？ 何ていうか……」

大切なヒトが撃たれたのに、冷静よね、ラっ
ちゃん、と。バンさんは苦笑しながらも、何
故かオレの方を申し訳なさそうな目で見て、
落ち着かない様子を見せ始めていた。

「……………」

オレが何かを口にしようとする前に。

突然バンさんは、ごめん！ と両手を合わ
せると。オレの前で両膝をついて、何度も頭
を下げる上下運動を繰り返し始めた。

「さっきラっちゃんを狙ったの、多分アタシ
のダーリンだと思うの！」

「は？」

「アタシ、昨日ダーリンに結界のこと、話し
ちゃったの！ まさかこんな事になるなんて
思わなくて！」

バンさんはうるうるした目でオレを見つめ、
事の次第を勝手に話し出すのだった。

「知つての通り、アタシ、この新しい政策に
は反対だったけど、実はアタシのダーリンも
そう。ダーリンはどうしてもデンちゃんを
暗殺するって言ってきかないから、そんなの
絶対無理よって、諦めさせようと思って、結
界のこと話しちゃったの」

ダーリンにそんな事させないためにもアタシ、
デンちゃんを説得しようって思ってたのにい
……涙ながらにそう語るバンさんに、残念な
がら今はまともな返答は出来そうにない。

「……会議が終わったら、都市長と話をさせ
てくれ。……その後はアンタ達の好きにしろ」
この筋肉男には、隙は見せない方がいい……
SKYの不在は伝えない方がいいなと何とな
く決めたが、その判断は後々、おそらくオレ
自身を助けることとなる。

バンさんはまだ手を合わせながら、理由に
ついては追求せず、わかったわとだけ言って
オレを都市長の控え室に待機させたのだった。

「単刀直入に言う。……命だけは助けてやるから、今回の法案は取り下げろ」

新法案についての審議が始まったばかりの中、控え室に戻ってきた都市長は、部屋にオレがいる事と、愛想のない言葉使いに大いに驚き。

「どうしたんだ、ラストイ君……？」

台詞だけ見れば完全にオレが都市長を脅迫してるが、一ヶ月間の媚売りの成果か、話をしてくれる信任はあるようだった。

「君はまさか、SKY君が負傷したから怖気づいたとでもいうのか？」

「その真逆だ。あんたがああ法案を取り下げられるとしたら、今のタイミングしかない」

「今の……タイミング？」

「SKYと何を契約したか知らないが、あいつは約束を破れば、その契約者を殺す。……」

あんたがもしも、もうやめたいと思っていたとしても、引き返すことが出来ないような代償を約束したんじゃないのか」

「……！」

都市長の表情はみるみる動揺の色に染まる。

SKYは離れた所にいると話すと、明らかに少しほつとしたような顔をするので、オレのハツタリは八割方当たってたんだらう。

……オレなりにこの男を、一ヶ月間観察しただけの意味はあったという事だ。

「君は……SKY君のことについて、やはりよく知っているのだな」

「オレもあいつの契約者の一人だ。あいつがどれだけ容赦ないかは身にしてみてる」

オレの盾になったあいつの姿が頭をよぎりながらも、そう言う都市長は、SKYへの依頼について初めて、弱音を吐ける相手が出来たと感じたらしい。普段の声の堅さが嘘のように、迷いだらけの口調で喋り出した。

「私は……私は正直、わからないのだ……」

SKY君の言う通り、母は確かに、この法案について母の方から提案し、これはこの都市にとって必要なことだと、私がやり遂げる日だけを待ち望んでいると口にするのに……」

机に向かいながら頭を抱えて、混乱した口調で都市長は続ける。

「それなのに母は、全く喜んで下さらないのだ。どれだけ根回しが進んでいても、賛成派が増えていく事を報告しても、今日の日という時が訪れても。私が反対派の人間に襲われた日でも、とにかく早く何とかしてくれと、そんな事しか口にされない……私は……母の望みを叶えようとしているはずなのに……」

何が間違っているのか、最早自分ではさっぱりわからないのだと、男は強い嘆きを見せた。

……この哀れな男は多分、ヒトの言葉の裏というものを考えられないんだらう。

だからSKYのような願いを叶える詐欺にひっかかり、その契約という言葉に縛られて、頑固に身動きがとれずにここまで来たのか。

「……あんたの願いと、その代償は何なんだ」

「私は……この法案を、母のために……必ず成立させることを、SKY君に依頼した」

そしてSKYは、男にこう伝えたという。

―必ず成立させる。そのために「成立しない要因」を代償に頂けると約束出来ますか？―
言われてみれば当たり前の話だとして、男はその条件を、特に代償を支払わなくて良い、幸運なことだと受け取ってしまった。

―法案の成立を邪魔するものは、何であつても排除します。……それは例えば、あなたも心変わりであつても、同じことですが―

決して挫けず、母の望みを叶えるのだと奮起していた男は、その内容で契約を受け入れた。

けれど実際、この男の母親が望んでるのは、多分そんなことじゃなかったんだから……。

オレは静かに、現実的な見立てを伝える。

「この法案が成立しても、都市長。あなたの母親は多分……この先もずっと……今以上にあなたを責め続ける」

「……………」

自分の存在意義を見失ったヤツに対し、辛ければ安楽死はどうかなんて……オマエはいらないって究極のメッセージだろうからな。

「それなのにアンタが命をかけて、世間の恨みを買いつつながら、今の決意を貫くことは……どう考えても、割に合わない」

貫いた所で得られるものは、結局何も無い。かと言って、心変わりすれば契約違反で命を奪われる。法案を取り下げないように言われても、この男が領ける道理はないのも当然だ。

「SKYだってああやって負傷する。あいつ自身は、約束の変更とか全く融通は効かないが、全てを思い通りに出来るわけじゃない」

……だから。あいつのあの姿を見た後なら、この男だつて。

「アンタの命は必ずSKYから守ると約束する。……アンタの母親に取り返しをつかない絶望を与える前に、法案を取り下げろ」

結局、否定してほしくてわざと反対の事を言うとか、そんなヒト心を理解出来る男じゃなかった。だから単刀直入に伝えたオレに、男は深く悩んだ顔を見せると……本当に守ってくれるのかと、掠れるような声できいてきた。

「もしも君が、彼女をこの都市から遠ざけることが出来るというなら。……今日明日と彼女の姿を見ないで過ごせたのなら……三日目の採決で、法案は取り下げると約束する」
男なりの確実な保身のためだろう。確かにこの三日間、法案を通そうとするSKYが男の傍らにつかないことは有り得ないので、それが精一杯の信じる基準だとして、オレにも納得のいく回答だった。

「……………」
「……わかった。SKYはもう、アンタの前には現われさせない」

……こうして、この依頼者の心変わりを促す介入があつたことを、今もSKYは感じ取っているのだろうか。

都市長の控え室を後にしたオレは、呼び止めてきたバンさんにも構わず、一路、足止めを頼んだタツクの元へ再び全速力となった。

*

「……えつ、えええーつつ!? ラステイが女のヒト、連れてきたのお!？」

……これは後々、オレがSKYを連れ込んでからの様子をタツクに確認したことだ。

サキのビックリは予想通りだが、タツクは意外に冷静に対処してくれたらしい。……アイツからきいた話だから脚色ありかもだけど。「まだ目を覚まさないが、サキはしばらく俺のそばにいろ。どうやら敵側の相手連れてきたみたいだから」

「そ……そうなの？」

「あいつは昔から、怪我をした相手は放っておけないんだ。元気な頃なら自分で精霊で治療してたんだろうが……」

でもだからって、危ないってわかってる奴を連れてきて、しかもヒトに足止めさせるかい。

タツクは最もな不平をぶちぶち言っており、オレも勝手なのはわかってたが、実際、ここなら彼女も安全で、そしてタツクならSKYを足止め出来ると踏んでのことではあった。

あんなノリの奴だが、ああ見えてタツクは

強い。ぶつちやけ霊獣族の長の直子で、妙な訛りの異大陸の人間との混血ではあったものの、能力的には全く問題なく、今も現役だ。元気だった頃のオレでも、アイツには霊獣がある分、本気で戦えばオレの方が分が悪い。オレが都市長と話す時間を稼ぐだけでなく、SKYに勝ってしまうことも、出来るんじゃないかと思うくらいだが……SKYが負傷してる今なら尚更に。

……それでもオレは。SKYの「攻略本」

能力を考えると、楽観は出来ずに。

「まあ、ラストが帰ってくるまで二人でみるか」

「うん。わたし、おしぼりとお水、用意してくる」

むしろ嫌な予感だけを胸に、帰り道を急いだ。

「……………」

汗ばむSKYの額を、サキがおしぼりで拭う。

「……………あ、れ？」

「サキ？」

立ち上がっておしぼりを水につけようとした時、サキが不意に、よろめいていた。

「どうしたんだ？」

タツクが受け止めるが、おしぼりもとり落としたサキは、なかなかしゃんと出来ず、

「……………わた、し……………」
横たわるSKYを見つめたまま、口元をおさえて黙り込んでしまった。

「……………サキ？」

ベッドの横に置いた椅子に座らせ、まだ放心気味なサキの顔を、タツクが覗き込むと。

「……………」

いつもなら、たとえ高い熱があっても、こういう時はすぐに大丈夫だよと笑うサキなのに。タツクの方を見ることすらせず、両膝に置いた手にだけは、膝に食い込む程の力が入っていた。

「……………このいつのこと、知ってるのか？」

「……………」

S K Yのことをひたすら見つめたまま、首だけを横に振って否定する。

……知らない、しっかりと首を振って、サキは否定しようとしたみたいだが。

「……サキ!?」

両頬に、サキ自身も気付かず涙が伝っていた。

タツクはかなり困惑しつつ、サキとS K Yを交互に窺い、黙って椅子の横に立っていた。

そうして、半刻もたたない内に。

「! 目が覚めたんか?」

うつすら目を開け、意識の戻ったS K Yは。自分を見ていたサキの視線に気が付くと。

「……………」

「……………」

しばらく無言で見つめあった二人は。

一人は当惑と混乱の中に、一人はやがて、不敵な微笑みを浮かべ……黒い女は体を起こして、白い少女にその手をのばそうとした。

「待てよ」

パシッと、サキに向かっただけのびかけたS K Yの手を、途中でタツクがキャッチすると。

「……………こんにちは」

S K Yはにこっとタツクに微笑みかけた。

「悪いけど、邪魔なだけで」

タツクは緊迫感を崩さず相対する。

「今はここから動かないでもらおう。文句があればラストイが帰ってきた時に言え」

「そういうわけには、いかないんだけど……なるほど、そういう手できたか、ラストイ君」

胸の傷は何処吹く風か、くすくすと笑い出す。

サキはまるで、遠い世界の出来事だとも感じてるかの如く、ぼけっとしていたらしい。

「三対一で、しかも負傷中なら仕方ないかな。」

「ちよっと仕込みを、使わせてもらいますか」

そう言っただけで、何処かに持っていたらしい、何か

の携帯スイッチをあつさりと呼ぶと。

突然外から耳を潰しそうな轟音が響き、窓から吹き込んできた衝撃に室内は荒れ狂った。

「なっ……………!?」

「きゃっ……………!」

その隙にS K Yは逃げる……わけではなく、立ち上がっていただけで、部屋の入口近くで

身体をのばし、痛たと呑気に無茶をしていた。

慌ててベランダに出たタツクが見たのは、

二階から上が吹き飛んだ、向かいの廃ビルで。

「なっ……………何すんねんオマエえ!」

あまりの驚きに一気に地が出たタツクは、

「才蔵!」

S K Yに向かい自らの分身を放ったのだった。

この下宿は南北に縦長で、三人で住むにはギリギリの広さだが、南北方向で言えば部屋二つ分+中央の階段分の縦幅はある。天井も高めで二階の部屋は北をサキが、南をタツクが使っており、その南から北向きに放たれた怪鳥の才蔵は、S K Yを突き抜けた後も奥まで突っ込み、爆発の衝撃で開いていたドアが壁ごと、更に吹き飛んでいってしまった。

「……………なー!?」

ところが、そんな才蔵の直撃を受けたSKYは全くピンピンしていたらしかった。

「残念。衝撃は魔除けで相殺出来るし、精神的に干渉する以外、直接人体を損傷するにあくまで実体ではない霊獣は、力の余波で物理的に干渉する以外、直接人体を損傷するとは無い。逆に相手の精神面、気力を削ぐことには長けてるようだが、SKYはそれではびくともしないようだった。

「おとーさん……………あのヒト、普通じゃ、ない」
呆然として動けないサキだったが、何とか自分なりに、状況を理解しようとしていた。

「仕方ないな……………怪我人、しかも女相手に、手荒なことはしたくないが」

……………と。タツクが構えをとろうとした瞬間。

「お。いい武器だねえ、これ」

間が悪いことに、ドアと壁が吹き飛んで中が見えていたサキの部屋に置いてある、オレ製の新作武器にSKYは気付いてしまった。

「あつ……………!」

駆け出そうとしたサキをタツクが止め、

「あの長物だったら狭いここでは不利だ。取り返してやるからオマエは動くな」

「う……………うん……………」

「その通りだけど。長物として使うとは限らないよ?」

その時点ではメイスのような形で携帯型だったオレ製ロッドを、SKYは片手でしっかりと握ると。タツクが先制する前に、一気に間合いを詰め、鳩尾に鈍い先端を叩き込んでいた。

「がっ……………!?!」

その動きの早さと精確さに、タツクは改めて驚きつつ、すぐ反撃するとSKYはひらりとかわして後退したが、武器がある有利性を生かし、じわじわ距離を詰めてくるのだった。

「……………!」

狭い所は不利だとタツクは言ったが。それはどちらかというところ、タツク側のハンデだった。霊獣とのコンビ攻撃に慣れたコイツには特に。

既に室内は無茶苦茶ではあるが、才蔵が思

う存分飛び回ると、この下宿自体が崩壊する恐れもある。先程の爆発で廃ビル前にも人間が集まってきており、騒ぎとの関連を気付かれないようにするには、何とかこの室内にいるまま、SKYを取り押さえるしかない。

「言っても……………」

「無理があるでしょ、さすがにそれはね」

「全くだ。ラストイの奴、覚えてろ」

それでもタツクは、至って平静だった。色々計算して自分を相手しているらしいSKYに感心はすれど、タツク側はまださっぱり、本気を出した状況ではないのだ。

何度かメイス対肉弾戦、たまに才蔵特攻を繰り返されると、SKYは元々の傷もあって、少し息が上がってきていた。

……………そこでサキに、異変が起こることがなければ。この勝負は間違いなく、タツクに軍配が上がっていただろう。

「うっ……!」

「サキ!？」

あるいはそれも、SKYが引き起こしたのかもしれない。この後に続いた状況を思えば。

「何だ……!？」

サキの周囲から急に、黒い炎のような渦が巻き起こった。隣接する物を全て弾き飛ばして、サキを取り囲むように旋回を続ける。

「暴走か……!？」

ここ最近、ヴァシユカを具現化出来なくなっていたサキの不調を思い、タツクが初めて焦り顔となる。サキは渦の中心でわけがわからず両耳を塞ぎ、必死に意識を集中していた。

「何これ……やだ、止まってェ!」

「サキ! 無理するな!」

SKYはそれを見つめながら、明らかに隙だらけなのに攻撃に転じようとはせず。

サキにそれ以上近寄らず、サキとSKYの中間に立ったタツクは……意を決したように、SKYに向き直った。

「……なるほど。それを使われたら、確かに、あたしには勝てない」

「……なるほど。それを使われたら、確かに、あたしには勝てない」

わかりきった事だったけど、と笑うSKYに。

そのすぐ目の前、突然タツクは姿を消した。

……数瞬後。黄金に輝き赤い翼を持つ大きな鳥が、タツクの立っていた所に現われ。

SKYに向かってただ一飛びのみ、最低限

の力で、その羽ばたきを見せ付けていった。

「……あーあー。……大穴、開いちゃったあ」

床に倒れながら、空を見上げたSKYが笑う。

黄金鳥の飛んだ衝撃で、東西の壁は大きく床

と平行に削られて外気にさらされ、飛び去った天井に至っては、もうほぼ吹き飛んでいた。

その上鳥は、向かいの廃ビルに火を放ち、

強風を起こし、地面を抉って土壁を作り。強引に周囲の人払いをしてのけていた。

「……待てよ。何で無事なんだ、オマエ」

彼ら霊獣族の奥義、実体化させた霊獣の代わり

りに実体を失い、消えていたタツクが再び現れると。倒れているだけのSKYを確認し、

不可解そうな顔で見下ろした。

「………たから」

「?」

「………に、守ってもらったから」

いつの間にかサキの周囲の黒い渦は消えており、それを見たタツクにも余裕が戻っていた。

それでもくすぐくすぐすと。倒れたまま笑いを堪える不審なSKYに、タツクが近づこうとした時。

「——えっ?」

それは……咄嗟に状況を理解出来なかった

サキが、ぼかんとした顔で思わず出した声だ。

「………なに!？」

突然背後から、黒い犬に飛びつかれて首元を噛み裂かれ、血煙を上げて押し倒されていく

タツクに。

サキはただ、真つ白になった頭で。

「……………ヴァシユカ……………」

と。タツクを襲った黒い犬を見つめながら、泣き出しそうな目で呟いていた。

「ぐあつ……………!?!」

背後からの奇襲に地面に打ち付けられ、そのままうつ伏せに自分を押さえつける存在に、タツク自身、混乱を隠せないでいた。

「悪いけどこれ以上、霊獣は使わせない」
起き上がったS K Yは、黒い犬の方を見て微笑む。黒い犬はそのまま、タツクの首元にもう一度深く噛み付き、骨ごと噛み砕いて周囲の組織と共にひき千切った。

「がぁぁ!?!」

「君の霊骨は、隆椎の棘突起かな。しばらく預らせてもらおうとしますか」

大丈夫、邪魔出来なくしたら命はとらないと。呆然としているサキにキレイに微笑みかけながら、S K Yは黒い犬から骨片を受け取った。

「何で知つ……………オマエ、一体……………!?!」

霊獣の媒体となる霊骨を強引に取り出されたショックで、全く身体が動かず、意識が落ちかかるタツクだったが……………黒い犬をお供に立ち上がったS K Yを見て、認めたくないある結論に、辿り着きつつあった。

都市会館を後にしたオレが、ようやく下宿の近くまで来た時。タツクの黄金鳥が出現し、人払いをしていく姿を、目の当たりにした。

「つて……………そこまでの状況かよ!」
慌てて周囲の建物の壁に、手持ちのダガーを走りながら投げ刺し、少しでも人間を遠ざけられるよう、急拵えの結果を仕込んでいく。

「それはさすがにないだろ……………!」
負傷したS K Y相手にタツクがそこまで手こずるカラクリがわからず、動揺が倍化する。

「……………躊躇ってる余裕はないってことか」
「ようやくオレの覚悟も決まり、そつと……………左肩に身につけた装具を、本格的に起動した。」

「……………ヴァシユカ……………どうして……………!?!」

S K Yに付き従う黒い犬だけを見つめ、サキは、震える声で問いかける。

黒い犬はその声が届いたのか、一瞬すつと、漆黒の毛並みが灰色に変わりかけたが……………。

「せつかく実体化したのに、戻しちゃうの?」
くすくすと笑うS K Yの声で、すぐに漆黒に戻ってしまった。

段々とサキの方へ、黒い犬と共に歩みを進めてくるS K Yに。サキは怯えというより、ひたすら安心して動けなくなった感じだった。

「あなた……………だれ……………?」
「奇遇だね。あたしもそれを、ききたかった」
ぺたんとして座り込んでいるサキの前までくると、膝を抱え込むようにしゃがみ、視線を合わせ。

「え……………?」
漆黒の目でサキを射抜くS K Yは、その時。幸せそうに笑いながらこう呟いたのだと、後にタツクは言った。

「あなたに会えて、やっとわかった……………
あたしが誰なのか……………」

—「今」しかわからないこの力では、自分の
過去を知ることが出来ない。

それでも、自分に近い誰かが何処かにいる
なら。それが何者であるのか、その命に直接
触れてでも感じ取ればいい。

「……………こんにちは。あたしは、あなたの
残りかす」

それだけ言うと、SKYは楽しそうに……
サキに向かって一瞬で、ステイレット型の短
剣を、胸の中心に深く突き立てていた。

ようやくこの下宿まで帰り着き、もう一度
二階に跳び上がった、オレのすぐ目の前で。

*

……………知らず。姉貴が殺された前後のことが、
走馬灯のように頭を駆け巡っていた。

—……………どうする？ 君の妹……………その左肩から、
摘出するかい？—

姉貴を殺した悪魔は、サキのオリジナルで
あるタツクの仲間を含めた、霊獣族タツクの
一族全てと。オレ達霊法種族も同様に、じわ
じわと内部から侵食し、やがて崩壊させる。

—君も、外に出たくはないですか？—
たった一人は、寂しいでしょう……………」

姉貴の元を秘密裏に訪れた悪魔は、まさに
悪魔の囁きで姉貴の心を動かしてしまつて。

ただ精霊がないだけで、オレと同等の資質
はあった姉貴は。仮初めの生きる力を与えら
れる事と引き換えに、持ち前の霊力で、悪魔
の望む通りに兵器を造った。……………それがやが
て、沢山のヒトの命を奪うとは知らずに。

—……………私のこと……………置いて出ていっちゃった
ラティちゃんにはわからないよ！—

オレが里を出た経緯を知らされていなかった
姉貴は、姉貴を止めに……………迎えに行こうと
したオレを信じず、悪魔以外に自分の味方は
いないと思ひ込んでしまった。誰が見たって、
姉貴は利用されているだけだったのに……………。

悪魔はただ、勢力争いから優秀な部下と兵
器を求めて、様々な千族に自ら関わり、氣に
入った者はスカウトするか、断れば殺してい
た。脅威となる一族は滅びゆくよう仕向け、
霊獣族と霊法種族はそうして、時を同じくし
て滅びを迎えさせられた。

それでも、殺した千族も氣が向けば、サキ
のような複製を試みられていたのだ。

……………今でも思う。オレが姉貴を、あの悪魔
から取り戻そうとさえしなければ……………姉貴は
殺されなくて済んだんじゃないかって。

—そのコは既に死んでいるんだ。いくら魂をとどめたところで、もう二度と……—

……二度と、姉貴に、オレの償いが届くことはない。

友達悪魔のおっさんは、元々悪魔がしたことなので、姉貴の魂を取り出すことは出来るのだと言った。オレの身を案じて、出来ればそうするようにと……最後まで勧めてきた人間くさい顔を思い出す。

—でも……そうすれば姉貴は本当に、この世から消えてしまうんじゃないですか？—

……もしも、この傷……蜘蛛の足がオレの心臓に届いた時は、この身体を姉貴が使えるようになるなら、なんて思った。それは有り得ないとおっさんが言っても……姉貴がきくと、それを望まなかったとしても。

それならせめて……オレ一人くらい、姉貴

の復活を願ってやらなきゃと思ったのだ。

そんな事有り得ないとわかってはいても。

最後の奇跡を切り捨てること……姉貴の存在にとどめをさしてしまうことは、自分の手では出来なかった。

そんな事を考えていたって。オレだって結局、死にたいわけでは決してなくて。

蜘蛛の足からの発作にはいつも必死で抗って、その度……次に意識が落ちてしまった時には、もう目は覚めないんじゃないかと。

穴ぼこだらけな短い先行きの上、それが見えない暗闇を、それでも進むしかなかった。

けれど。いくつもの夜を、発作と共に眠りについて、闇の中をさまよっていても。

飽きずに毎朝、引つ張りあげてくれる誰かがいたのだ。……本当に、毎朝。

「……………サ……………キ……………」

本当にオレはいつも……誰かを巻き込んで、辿り着いた時には手遅れなんだろうか……。

姉貴にしたって、サキにしたって。

もしかしたら、まだ助けられそうな状況に見えていたって……昔と違って今のオレでは、助ける手段さえもが錆び付いている。

S K Yの短剣で胸を貫かれ、霊獣族の証である霊骨を、胸骨角から抉り出されたサキは。

崩れ落ちる寸前にオレが抱きとめS K Yから引き離れたが、オレの腕の中でぴくりとも動かず、硬く目を閉じ。どんどんと赤く染まる白い服に、頭がどうにかなりそうだった。

「あれれ。左手、動いてるね、ラストイ君」短剣の先の霊骨を抜き取りながら、呑気なことを言っつてこちらを見る、虚ろ気な黒い女。

「その肩当ての効果かな？ この一ヶ月、頑張っつて造つてたものね……ようやく、悪あがきする決心がついたんだねえ」

女が何を言っているようだが、サキの止血をしよ
うと必死なオレには届かない。

コート裾を破って胸をきつく縛ると、一
瞬だけサキは顔をしかめたが、すぐまた硬い
寝顔に戻っていった。

「……こら、起きてるなら眠るな、サキ！」
その様子を見て、オレの意識にも火が入る。
即死でなければ助かるかもしれない。

「オレさえその気があるのだったら。
」起きろってーの！ 寝起きだけはいいのが
オマエのとりにえだろ！」

タツクがやられ、サキも死にかかっている、
この考えられる限り最悪に近い状況で……。
せめて誰か一人だけでも、助けることが出来
るとしたら。

「……この誰かを、今選べと言われるのなら。
こいつが目を開けてくれない事には、オレ
としてはどうしても踏ん切りがつかなかった。
流石に無駄だとわかりきっていることに、
イチかバチかの賭けは出来ない。」

……こいつがまだ生きていて、目をあける
だけの命が残されているなら。オレの残った
命を使い切っても、精霊の力を使ってみる
ことは出来る。

ただ、それで本当に助けられるのか……。
今のオレに本当に精霊が制御出来るのか？
そしてその後、オレが倒れてから、SKY
が手をひいてくれるのかもわからない。

タツクも無力化された以上、オレがくたばっ
て、サキも動けなければただの全滅だ。

「おいこら、バカ娘！……暴れ者のお嬢！」
最後の声に、サキも四年前を思い出したのか。

「……サキ！」
「……………」

サキはようやく、うつすら目を開けると。

その目に確かに、オレを映したサキは……
わずかに不思議そうな表情を浮かべた。

「……………手……………ラス、ティ……………」

オレの左手が動いて、サキの体を支えてい
ることに気が付いたのか。

SKYと同じことに気が付くような、この
期に及んでヒトのことばかり気にしてるこ
いつは……何故かSKYを彷彿とさせる、た
だし嫌味のない表情で、わずかに微笑んだ。

「サキ？」
「……………」

胸から流れた血が滲む右手で、ゆっくりそっ
と、オレの左肩に触れる。

その後、力なく落ちる右手と、閉じられる
両の目……それでも確かに、その直前に、左
肩を何か温かいものが伝っていった。

「……おい！」
「……全身をまた。数時間前のような怒気が、慌
しく駆け流れていった。」

……オレは一体、いつまで何を迷って……
何を躊躇っているのだろうか。

—おはよー、ラストイ。よく眠れた？—

ここで、自分の命が無駄遣いになっても
—今は……ラストイに生きてほしいな—

助かったかもしれないサキを見殺しにして、
死ぬほど後悔するよりはずっとマシだろう……

……そう考えると、不思議と気持ちが悪くなり。

「……ゴメンな、サキ……姉貴……」

魂からの願いにそっと耳を傾けるだけで。

精霊との話し方を、思い出した気がした。

「……お」

サキから奪った霊骨を握りしめて座りながら、
何故か成り行きを見守るSKYは、オレの変
化に気付いたようだった。

「そっか……ついに精霊、使っちゃうのか」

傍らに立つ黒い犬をもさもさと撫でて、感慨

深いような顔で呟く。

「まだ守るもの残ってるのに、死んでもいい
て思えちゃったか。……往生際が悪いのが、
ラストイ君のとりにえだったのにな」

黒い犬にそうして何かを囁くごとに、段々と

それは、より深く濃い黒色になっていくよう
だった。何かの制約が解かれるかのように。

——……そっか。ラストイくらい強くつても、

不安になっちゃうこともあるんだね—

薄れゆく意識の中で。

ちよっと前に誰かがそう言って、当たり前
だと言いたくなりつつ、かっこ悪いので黙っ
ておいた言葉を思い出した。

——……そうだよ。……でもきつとラストイ

は、そういうの、嫌なんだよね—

……悪あがきはしたくないと、ずっと思っ
てるつもりだった。

でもその思い自体が悪あがきだった。実際
のオレは、いつでも諦めが悪いんだから。

弱くなっていく自分を突きつけられるたび、

何とか抵抗しようとする思いと、何ともなら
ない現実と。その両方に打ちのめされて。

手を差し伸べてくれる奴は、沢山いすぎて
……無様なこの姿に、オレ以上に打ちのめさ
れたような顔をするから。

だからディアルスを後にしたのに……頼み
もしないのにこいつらは追いかけてきた。

当たり前という顔で凶々しく住み込んだこ
いつらは、オレがどれだけふてくされてよう
が、いつも笑ってそこにいてくれた。

……有り難うと。まだどちらにも言えてな
かったから、ここで消えるのは嫌だななんて、
往生際の悪いことをまた思ってしまう。

オレのそんな思いを、知ってか知らずか。

左肩がぼわんと、温かくなつていくと……
懐かしいヒトの声が聴こえた気がして、故郷
の精霊はそうして久々に、息を吹き返した。

——…大丈夫……—

精霊と話をするのは久しぶり過ぎて、何か話せばいいか全くわからない。

左肩も命の流出に激しく痛み出していた。せつかく感じていた精霊の吐息が遠ざかる

……こんなんじゃサキを助けられない。

「頼むから今だけは大人しくしてくれ……！」

——…——

サキを離してしまいそうになる程の痛みの中。大丈夫だと……何度も柔らかな声で繰り返したのは、一体誰だったんだろう。

——…大丈夫……— ちゃんは、精霊さんと話すの、とても上手なんだから……—

その微かな声と共に……左肩に温かみが戻る。

——…一人じゃ、ないから……—

そのまま、強く願うだけでいいんだよ……と。

泣き出しそうな一瞬の白いユメが過ぎて。

……次にオレが目を開けた時には。サキの胸の傷はすっかり、塞がっていたのだった。

「……………いい？」

久々に使った精霊の力の実感と。今ここにあり、自分自身への妙な違和感に、座り込みながらオレは思わず全身を見回していた。

「……………え？」

隣で倒れているサキは、傷は治っているのにぴくりとも動かず。そして精霊をついに使った、オレ自身の体調はというと。

「……………何とも、ない？」

——ちよつと待てと。焦ってサキの方を向き、

「—オイ！ ほんとに生きてるのか、サキ！—」
自分が何ともないということは、やっぱり失敗してしまったのか。必死にサキを揺さぶる。

対象の命が残ってなければ、いくら精霊で

も傷を癒す事は出来ない。だから治療自体は確かに、サキが生きてる間に成功したはずだ。

……それでもサキが、息をしてないのは……

……どうということなんだ？

「—どうでもいいけど。そっちの男のことも、

ちよつとは心配してあげたら？」

くすくすくすと、サキの霊骨とはまた違う骨片をいじって笑うSKYに、オレもハタとしてサキを抱え、うつ伏せに倒れている奴の所まで辿り着いた。

「—おい。生きてるのか、タツク」

「……………死んどるわ！ ……悔しいけどいっこも動かれへん……—」

「サキが息をしてない……傷は治ってるのに……霊骨が戻ってないからか？」

「……………それは違うで。多分、あいつに引っ張られてるんや。あいつ、サキの力を奪いよつたみたいやからな」

「—!?!?—」

SKYの方を振り返ると、不敵に笑う女の後ろで、黒い犬の姿がゆらゆら揺らめいていた。

「—うん。時間をくれたから、あたしの方も、

うまいこといったよ」

心なしか、SKYの姿が、ぎざぎざ……と薄れる。

「サキの力を奪ったって、どういう事だ？」

「あいつ、霊獣の力を持つとる。多分サキと同じ奴に造られたクローンや……ヴァシユカを強引にあいつ仕様に塗り替えてもーた」

「は！？ ……似てねーし！？」

それでもあの黒い犬が、ヴァシユカの成れの果てやで、と。言ってるそばからそれは、ゆらゆらと灰色になったり、黒いまま猫の姿になったりと、不安定な変態を繰り返した。

「……うーん。凄く惜しいけど、クローンと言われると、多分違うんだな。同じ源の力を分けて、あのコの方があたしより沢山持ってたから、今までコレも使えなかったけど」
SKYの背後で揺らめく黒い犬は、段々と空気で黒く染めていくような勢いだ。

「その男が言うように、同じ悪魔の所にいたことは、間違いがないよ。……多分あたしの方が、オリジナルに近いけれど」

その言葉を証明するかのように……揺らめく黒い犬が、突然巨大な咆哮をあげると。

「まさか！？」

「嘘やろ！？」

黒い犬は、最早犬というより、狼のような激しい形をとっていた。そして二階に治まり切らない程の大きさにどんどん増大していく。

「そんな……！ 何で……！？」

期せずして、タツクとオレは、あれは……！？と、全く同じタイミングで呻いた。

崩れた壁の外に現われつつある、巨大な黒い、狼型の実体化霊獣。そしてそれを実体化したかわり、実体を失いつつあるSKYは、
「ラストイ君がこれ以上仕事の邪魔をしないと云わない限り、あたしもお相手しなきゃね」
本来の標的である、オレに向き直った。

「……でも今、他に武器がないし。それならあたしも……戦い方を変えるしかない」

それだけ言い残すと。場から完全に消え去り、黒い狼に後を任せただった。

おまえなあ……！ と、タツクとサキを抱

え、狭い部屋と瓦礫を盾に逃げ回るオレに、容赦なく黒い狼の鉄拳が乱れ撃ちされる。

「怪我してんなら寝てろよ！ ここまでやってあんなトンデモ政策叶えるような必要性、何かあるのかよ！」

それは、単に「依頼をされた事」とその「契約」自体に重きを置いているSKYにとって、意味のない質問だとわかってるオレのだが、……これも勝算のない状況に放り出されると、グチの一つも言いたくなってしまう。

「ようわからんけど、何でオマエがそんなん関わってんねん……！？」

「やめさせよーとしてるのがオレで、邪魔する奴は殺すって言ってるのがこいつー！」

無茶苦茶やな……と嘆くタツクの勢いが拙い。あの黒い狼を目の当たりにしたせいだろう。

「ラスト、もうええから俺は置いとけ！ このままやったら共倒れやろーが！」

*

「オレのせいどころになったのにふざける！
霊獣のことはオマエらの方が詳しいんだから、
何か対策考えてくれよ！」

オレの精霊は攻撃には向いてないし、こんな
デカブツ相手にダガーとか悲し過ぎるし。

「くそつ、息が上がる……！」

足がもつれて絡む。それでも昔の勘か、逃げ
ながらも効率良く動け、何とか喋れてはいた。

……と言っても流石に、ヒト二人抱えての
逃避行が、そんなに長く持つわけもなく。

「——つつ！——」

左肩が一瞬強く痛み、体の動きが鈍くなる。

黒い狼の前足が背中をかすり、その衝撃は
魔除けでも抑え切れず、タツクとサキを抱え
ながら吹っ飛ばされて、壁にぶち当たった。

「大丈夫か、ラスト!？」

咄嗟にサキをかばったことで、衝撃はほとん
どオレが受けて、タツクのことでも手放してし
まった。三人で壁際に追い詰められた形にな
り、黒い狼が空に向かい戦慄の咆哮をあげる。

「つたく、こんな単純攻撃しか出来んよーな

出来の悪い実体、俺なら絶対負けへんのに！」
黒い狼が再び前足を振り上げ、追い詰められ
たオレ達に向かって勢い良く振り下ろす。

「つのやろ……サキに当たるだろ!!」

痛みと怒りのままオレの躊躇いも吹っ飛び、
奥の手を取り出し、久々の解放の力を込めた。

「ラスト、それ……!!？」

負傷したSKYが置きっ放しにしていた、携
帯型をとった双鎌を元の姿に戻し。黒い狼の
前足を受け止めたオレを見て、改めてタツク
は色々びつくりしているようだった。

「……ぐつ……！」

「精霊の時はほとんど何ともなかったのに、
双鎌に力を込めた途端に、全身の気だるさと
左肩の悪寒が本格的に目を覚ました。

「やべー……これ、まじで死ぬる……！」

この巨大な狼の打撃を受け止められる力だ
し、当たり前だったけどな……じりじりと押
してくる前足を、気合いで何とか跳ね除ける。

「ツは……!!」

口の中に上がってきた鉄の味を気にする暇も
なく、ダメ元かつヤケクソで、いつもの薬を
一気に三錠、赤いものごとのみこんだ。

「——つつつつ！」

体が沸騰し、意識が飛びかける。痛みは倍加
なんてもんじゃないが、思ったよりもそれは
効果的で、熱がそのまま力になりそうだった。

けれども、その後も繰り返される鉄拳は、
段々と精度を上げてきていた。

SKYは当然、この狼を使い慣れてないが、

「あいつなら例の能力ですぐに慣れるはず——
多分、戦闘が長引けば長引く程に。実体化ま
でいきなり出来てるのがそのいい証拠だった。

「——とにかく、これじゃ勝ち目ナシだろ！」
タツクとサキを背に、防戦一方の状況で自棄
的に叫んだ。タツクも提案する。

「俺を囮にしてこいつを足止めでどうや！」
そんなの論外だ。ただ確かに、このデカブツ
の動きを一度止めないことには、活路はない。

「あかん！ 次の攻撃、溜め技で来るで！」

「！」

タツクの言う通り、狼は一度わずかに後退し、

一呼吸置いていた。前足の周囲が揺らぎ出し、

黒い炎のようなもやもやが現れる。

「……………」

オレも双鎌にありつたけの力を込めるが……

実体というあの密度とこの体勢では、「対能

力」の双鎌は、余程隙がない限り生かせない。

「………もう力、残ってねえし——

体はミシミシ、口の中には鉄の味しかせず、

今までの攻撃を防ぐのがやつとだった状態で、

本当にアレを受け止められるのか……。

——迫り来る終結を早々に悟り、心が冷えた。

……それでも盾くらいにはなると心を決め、

気取られないよう、力強く双鎌を構える。

S K Yもわかって、とどめなのかもしれない……

……オレが落ちれば、こいつらを深追い

する理由もないはずだ。今となってはあいつ

のそういうカタブツさに期待するしかない。

来る！ と、タツクの緊張の掛け声と共に、

狼の前足が振り落とされる。

——まあオレ、頑張ったよなど。

自分でも驚くぐらい平静な気持ちで、迫り

くる黒い炎を両目に受け入れていた。

……。

……。

………。

オレを双鎌ごと蹴散らし、タツクやサキに

も余波が及ぶはずだった、黒炎の鉄拳は。

……立ち上がってヒトの前に出た、黒い狼

に対して小さな掌底を向ける、白い少女の直

前で……ぴたりと止められていた。

「……サキ……！」

——生きてたのかと。オレの中を一気に、安堵

の思いが駆け巡った。

それはタツクも同じようで、うおあー！ と

無理ムリに顔を上げて奇声をあげる。

「ごめん……遅くなっちゃった」

てへ、と苦笑しながらサキは、何処か今まで

より大人びた顔で、オレ達の方に振り返った。

「バカ、下がれよ！」

ヒトの前に出たサキの更に前に出ると。サキ

はすぐ後ろからオレの腕を、凜とした顔つき

でそっと掴んだ。

「……ラステイ。私を手伝って」

「えっ？」

「おとーさんの霊獣を取り戻すの。私があつ

コを止めるから、ラステイはその後をお願い」

その真剣な眼差しは、今までのサキからは考

えられないくらい、強い意志に満ちていた。

「つて……何言うてんねん、オマエ！」

オマエに何が出来んねん、下がらんかいと、

半泣き状態のタツクはどうやら、オレ以上に

サキの安否を気にしていたらしい。……口調

のことも気が付かないくらいに。

「俺が慣れて動けるくらいにはなる！
オマエが無理することは何もあらへん！」

「でも私のヴァシユカがしたことだもの……
いいよね？ ラステイ」

「……………」

再び力を溜めている黒い狼の前で、四の五の
言ってる時間はなかった。

「—わかった。勝算はあるのか、サキ」

「……ヴァシユカはとられちゃったけど……

まだ私が、ここにいるから」

サキは黒い狼を、悲しそうな目で見つめると。

「あのヒトに近くで触れて、私もわかったよ。

私達は……同じことが、出来るはずだって」

そう言つてサキは、力強いVサインをオレに

してのけ、オレまで何でか根性が座り。

「はぐれ霊獣族サキちゃんの真の姿、ここで

見せてあげる！」

ずん、とオレより更に一步前に出ると、自分
の何十倍もの巨大な狼に向かい、腰を落とし
て拳を掲げた構えをとる。

—つて、猛獣相手に素手で立ち向かう気か

あいつは！

サキならやりかねないと、オレが一瞬焦つ
たその時……唐突に、赤みに染まった白い服
を着る少女は、場から消え失せていった。

「……………!？」

その現象が示す事態に、オレとタツクは揃つ
て驚きの顔を見合わせると。

間髪おかず一瞬の間の後……オレ達に再び

足を振り下ろそうとした黒い狼を、その上半

身ごと、一筋の白い光が弾き飛ばしていった。

そして、白い光が地上に降り立った時。

「……まさか……実体化か!？」

そこにいたのは、ヴァシユカよりも更に大
きく、そして猫型をしている白い霊獣だった。

大きさ的には大の男と同じ程度だが、その

存在密度は確かに、実体としてそこに具現さ

れていた。SKYが「噛み付ける」黒い犬を、

霊骨を奪う前に既に連れていたように。

「霊骨もないのに、何でやねん!？ しかも

……白い猫、やと……!？」

その白い猫も、黒い狼も、サキのオリジナル
……かつてタツクの仲間であった霊獣族が、
この世に具現させた霊獣とそっくりであり。

サキとSKYが同じ存在に繋がることを、

改めて裏付けるその状況に……タツクは半泣

きどころか、歯を食い縛って大泣きしていた。

まあ、無理もねーけど……惚れてたもんな

タツク……死んだそのヒトに。

サキのことを素直に娘って言えないのも、

大方その辺りがひっかかってるんだろーし。

アイツ曰くふられたって話だったし。

黒い狼を奇襲で一撃した白い猫は、改めて、

咆哮を上げる黒い狼に怖気づかず相対する。

—私があのコを止めるから—

そのサキの台詞を、思い出しはしたものの、

「どうするつもりなんだ、あいつ……!」

正直、体格差の有り過ぎるあの状態で、期待

しろという方が無理がある。

「大丈夫! 私に任せてて!」

なっ！？ と、タツクと二人してまたしてもぶっ飛んだ。白い猫はサキとほぼ同じ声で、「私をただの猫だと思ったら大間違いよ！」と。……猫の姿のまま、喋りまくっている。

……えーと。あいつらにとつて、霊獣を実体化して自分が消える時は、あいつらが存在する世界そのものが丸ごと入れ替わるんだと、確かきいてんだけど。……だから物質である服だけが残ったり、あいつらが戻った時、何も着てないことはないって話なんだけど。

……要は、異世界からサキが喋っても、声……届くはずはねーと思うんだけど。

「れ……霊獣が喋るなんて、きいたことあるかー！！！」

うん。長の家系が言うんだから間違いない。どんな反則やと強くツッコみつつ、未だに全く動けないでいるタツクだった。仕方ないのでオレも、黒い狼が白い猫と睨み合おう隙に、もう一度癒しの力を使ってみることにする。

サキに対してやってみたように、気負わず精霊に話しかけてみる。今度は大きく難を感じる事もなく、タツクの傷も癒す事が出来た。

「……お。……動ける、わ……」
霊骨が戻っていないため、霊獣を具現化することは出来ないようだったが、ひとまず動くことに関しては支障なさそうだ。

タツクのその姿を見て、白い猫もいつそう、やる気が出たのか……黒い狼に対して、毛を逆立てて腰をひき、跳びかかる寸前の体勢をとった。

「……！！」
白い猫のその体勢に、オレもさつき最後の力を込めた双鎌を握り直し、次の事態に備える。

四本足で地面を震わせて咆哮する黒い狼に、
「……そんなに暴れて……！！」
サキの声よりはもう少し低く、そのため尚更大人びて感じる声で唸る白い猫。その体からまた白い光が発し、段々輪郭が揺らぎ出した。

「おとーさんとラスティを傷つけたこと、反省させてあげる！」

ついに白い猫は、光と共に黒い狼に向かって全力で跳びかかった……かに、見えた。

「……はい！？」
白い猫の上半身は、確かに黒い狼の胸元まで躍り上がっている。

ーが。下半身は、地面に足がついたままで。
「これが私の真の姿……だったらいない！
いくよ、猫童ちゃーん……！！」

その、今この瞬間もぐいぐいと伸びて上半身についていく、長い長い胴体は。

黒い狼の首を一周し着地してから、四本足の間をぐるぐると上半身だけで駆け回り、力任せに縛り上げた。

「……つて……ちよつと待てエー……！！」
猫童って何だあー！！ &何やねん……！！
オレとタツクの何度目かのツッコミタッグも、そのぶっ飛び反則娘には、届くことはなく。

巨体の頭と四本足をまとめて封じ、凄まじい振動と共に、黒い狼を倒れ伏させた白い猫竜……もとい、物凄く胸の長い化け物猫だった。

「……………！」

あまりにツツコミ所の多い事態ではあったが、オレだつて自分の役目を忘れたわけじゃない。

「よし、よくやったぜ、サキ……………」

今の自分に残った力を全て流し込んだ双鎌を、体が左肩の呪いで崩れ落ちる前に構え直す。

この黒い狼は間違いなく、負傷したSKYの切り札はずだ。……それならオレも、今

ここで躊躇う理由は何もない。

「あんたが死者をも駆り出す死神なら……………」

オレの命もくれてやるから、好きにしろ！」

倒れ込んだ黒い狼に向かって跳躍する。

——双鎌が自分の一部みたいだった頃を思い出す。

それに引き換え、この黒い狼からはSKYの気配など、わずかにしか感じられなかった。

いくらあいつ自身が、負け知らずの攻略本的能力の持ち主だったとしても。あいつ以外のものまで、同じ強さに来れるわけじゃない。

黒い狼の首元から骨盤まで、内部に満ちている力ごと、巨体を大鎌で縦断し切り開いた。

……いつかの日のタツクの仲間に、心の中で謝つてから……その残骸に別れを告げつつ。

*

「……………？」

その頃、都市会館でのこと。

本日の会議の後半を終え、総会初日を曖昧

過ぎる決意状態で過ごした都市長は……………コン

コンと居室がノックされている音に気付いた。

恐る恐る部屋を開けると、訪室した相手を

確認し、安堵の顔をして相手を迎え入れた。

……それが、彼の失脚の始まりになるとは夢にも思わずに。

「……………あーあ……………」

最早、どう取り繕いようもない程ぼろぼろになつてしまった、下宿の二階の床で。

自分の体がそこに倒れている事を確認するかのように、戻ったSKYは声を出していた。

「あー……………痛いねえ、これ……………」

指を動かすことも出来なかった彼女は、それ以上何かをするつもりはないように見えた。

獣体と人体は感覚を共有している。双鎌か

らのダメージは黒い狼を通して、SKYにも

届いているはずだった。気力面も削つては

ずだし、意識があるのが不思議なくらいだ。

「……………やっぱりなあ……………ああいう反則さん達

には、かなわないねえ……………」

オレやサキも、SKYと近からず遠からず

の動かない体で、下宿の二階でばらばらに倒れこんでいた。

意識のないサキの元にはタツクが駆けつけ、SKYから引き離していたが、SKYのすぐ近くで倒れていたオレの方には、どうやら来てくれそうになかった。サキの安全確認と応急処置が終わるまでは来ないつもりだろう。正直オレ、多分今、死にかけてると思うけどさ。葉やら戦闘やらでもう体ぼろぼろだし。

「それにしてもラストイ君……ひどくない？ヒトにくれた武器でヒトのこと攻撃するとか……双鎌返さない約束違反で殺している？」
「……抜かせ。勝手にケガして倒れたあんたからの預かり物を、ちよつと借りただけだ」
大体……とオレは。ぴくりとも動かない体で空だけを見上げながら、

「ひどいなんて言うの、今更だろ。……オレ、あんたにひどいことしかしてないんだから」
それもそうかとSKYは、笑ったようだった。
千族同士、体は動かない程の深刻ダメージでも、話をするくらいは出来るのだった。

「んーで……都市長のおっさんからは、手をひいてくれるんだろ」

このダメージじゃまず絶対に、三日間の総会に間にSKYは復帰出来ない。彼女の不在のせいで、この最初の総会で契約通りに法案が通らないなら。依頼不履行の責任は都市長ではなく、彼女に帰するはずだった。

「そうだねえ……これは護衛としてのあたしの不始末でもあるしねえ」

「……へ？」

……しかしSKYはオレの思惑とはまた違う、失敗の原因について考えているようだった。
「残念だけど、ラストイ君。君の健闘も空しく、都市長はついさつき失脚されちゃったよ」

「……は？」

「バンさん、あたしも君も会館にいないことに気付いちちゃったみたいだね。都市長が結局、総会が始まって説得タイムリミットが迫っても、あの政策をやめるって言わないから……愛のムチをくれちゃったみたい」

……SKY曰く。都市長はバンさんから、あの巨斧による両膝砕きを見舞われたとのこと。

「別に殺さなくたって、総会に出席させなければ、法案はそもそも審議出来ないでしょ。やばいなあとは思ってたんだけどな……予想通り、痛い事態になってしまいました」

ここでの事もあるが、都市長をまず守り切れなかったのが、今回の契約は無効だということ。

「……バカじゃないのか、あんた。何で今まで、知っててバンさんを見逃してたんだ」

それに……と。

「今朝、オレをそもそもかばわなければ、都市長の護衛だって穴は開かなかつたらーに」
甘いねと、くすくす笑いで彼女は返答する。
「だから、バンさんには敵わなかったの。あのヒトも大概、反則なヒトだからねえ」

「……何が言いたいんだ？」

「バンさんはずつと、あたしとラストイ君をマークしてたよ。都市長に何かをする時には、最大の障害になるってね」

……へー、と思わず。あのおねえ口調の筋肉男の顔つきを、必死に思い出していた。

「同時に、とても気に入ってくれてましてね。」

あたし達を順に、自然に始末するタイミングを窺いながら、都市長にはあたし達を良い護衛だと凄く売り込んでくれてたし」

「……何だソレ」

何ていうか……一応、まっとうに見えていたバンさんが、矛盾だらけな善人で外道なのはわかった気がするが。

「バンさんがいるから、防衛面であたしは、ラストイ君をスカウトしたわけだったけど」それは都市長の文字通り失脚を防ぐ意味、つまり、護衛としてのSKYの目的で。」

「後々あなたが障害になるのも、わかった」
「……じゃあ……何で」

「バンさんやラストイ君がいて、あたしを排除して……都市長を説得してくれるなら。」

それはそれで良かったんだよね」

「……どーいう事だよ？」

—その方がやること、増えるからね、と。

今までにほとんど聴いたことのないような、何でも屋としての冷めた声で。SKYはそう呟いて、嘲笑うように続けた。

「でもバンさん、あたしもラストイ君も退場したもんだから、行動に出ちゃったわけだ」SKYはあえて、それを一人勝ちとは言わなかった。……バンさん本人はきつと、本意でそうしたわけではないんだろうから。

「惜しいなあ……あたしも不在で、ラストイ君だけが会館に残っていれば。バンさんは嫌々、ラストイ君を襲ってくれただろうに」その光景も見物だったろうにね、と笑う。

「……おい」

「あたしが自分で動かなくても。バンさんがここまでしてくれるとは、思ってなかったよ」だから、敵わないあつて。

そのSKYの言い草は、要するに……。

こいつは結局、この結末を、喜んでいる。

バンさんも都市長もオレも……ともすれば

サキやタツクと、もしかしたらこいつ自身も含めて。大勢が痛みを受けたこの成り行きに。

仕事の完遂に対する拘り以上に……きつとそちらの方が、今回彼女には重要だったのだ。それがわかってしまったオレの中に。

急速に、得体の知れない感情が湧き上がっていた。

「…………？」

—SKYが不思議そうにする通り。ほとんど動かないはずの自分の体に、火が入っていた。必死に上半身を起こし、頭側で倒れていたSKYの顔を、自分の肩越しに見ると。

SKYは実際、口調とは裏腹に全然表情は笑っておらず。力なく横たわったまま、ともすれば哀しげにも見える目で空を見ていた。

「あんたさ……仕事を口実に、それだけ周囲に嫌がらせして。結局、何がしたいんだよ」

「…………」

さあ、ねえ……と。

オレの問いかけが、こいつ自身の疑問でもあったのか……目を閉じてしばらく、マジメに考え込んだSKYは。

「……望むことを、為せと言われたから……そうしていたら、こうなったなら……これがあたしの、望みなんじゃない？」

やっぱり、仕事なんだろうなあ、と。

その回答は結局よくわからなくて。

オレはアホみたいな事しか言えなかった。

「そんなに仕事をしたいなら、あんた……」

「……?」

その声に目を開けて、笑顔すらない、黒いだけの眼差しでオレを見たそいつに。

はつきりと顔を逆正面に覗き込めるよう、彼女の両肩辺りに手をつけてから。

「そんなに仕事をしたいなら、あんた……オレんところに永久就職しろよ」

こいつでなくても意味、わかんと思うけど。

早い話、うちに嫁にこいの問題発言。

「……………」

彼女は、へえ……とだけ。

ただ、微笑んだ。

「……何とか言えよ。……何でも屋」

その一言が余計なのは自分でもよくわかった。

「……何でも屋」

SKYは、何かを思い出したかのように……横たわったまま両目を穏やかに閉じると。

無様だね、と。珍しく、眼前のオレにやっ

と届く拙い声で、笑みもなく薄く目を開けた。

「……前に、話した事があったね、ラスト」

自分には何でも屋以外、する事がないと。

それをもう一度口にしてから、SKYは、

動かない自分の全身を改めて見つめる。

「何でも屋じゃなきゃ叶えられないような願

い……この黒い獣の骸は、そんなヒトの業

ばかりを糧として、辛うじてイキモノとして

成立してきた」

でもね……と、何の光を持たない眼差しでも、

この時だけはまっすぐに、オレの目を見て……

……彼女は、満足そうに笑った。

「でもね。だからこの体には、それしか叶え

られるものはないんだよ」

にはるかに遠くを見ていた。

「ヒトの愚かな願いしか、自分には理解出来ないのだと。」

「……この体で目を開けて、気が付いた時。」

「ここにあったのは、愚かしき誰かを傷付けた……その思いだけだったから」

「誰かを……傷付けたい？」

「唯一の衝動……でもそれすら、理由なんてない空っぽ。だからあたしには……」
「真心で求められた願い」は、叶えることが出来ない
依頼に応えたくても、応えるための真心がないと、彼女は淡々と口にしていた

「……だから……ありがと、ラスト」

「SKY……？」

覗き込むオレを見つめて再び表情を消す。

「その願いは、あたしには叶えられない」

今日の仕事の結果もそうだけど……と。

「依頼にこたえられない何でも屋なら……」

「ここに存在している意味はないから……」

「だからあたしは。」

消えるしかないね。

ふわりと微笑む。

それは、これまでのどんな笑顔より優げで、同時に清らかなサヨナラだった。

「……って、そんなのアリか、オイ！」

思わず見とれてしまってる場合ではなく。

「出来ないこと依頼されたら逃亡するとか、子供かあんたは——！」

どんな仕組みか洒落にならないが、両手両足から灰になっていく彼女の姿は、さながら日の光を浴びた、吸血鬼のような潔さだった。

「断りやいーだろ！ それくらいの特権はあんだろ！ ただの仕事なんだから、今まで生き物やってきたんだから！」

やわらかく目を閉じて崩れさっていく姿に、何でもいいからだだ必死に呼びかけた。

「SKY……！」

「あんた、誰なんだと。」

その姿にどうしてか、オレは最後に叫んでいた。

その声に彼女が目を開けたと同時に、全身が崩れ落ち……その灰すらも霧散する。

……あまりのあつけなさに、これで彼女が消えてしまったとは、とても思えない一瞬の退場だった。

「……………」

崩れ落ちる直前の顔が目に焼きついていてた。

彼女は確かに目を開けて、呟いたのだ。

いつかのように、無自覚な目をして。

「……………」

「一緒に、と。その後をつなげているのは、あくまでオレの勝手な願望だろうけど。」

「……誰かを傷付ける……そんなことしか、したい事がなかったのか、あんた」

それが、さっきのオレの問いかけへの、彼女の本当の答えだったんだろう。

後に残った、タツクとサキの霊骨を拾って呆然と眺めながら。自分でも不思議な程冷静に呟いていた。

「それなら別に……何でも屋でなくたって、出来ただろうに。……律儀過ぎるだろ、代償を取立てるためでならとか、そーいうの」

……あいつはあの時。自分を、サキの残るかすだと言った。

それならあいつは、サキに欠けてた、悪意とか不平の塊なんだろうか？

……それにしたって、足りないものが多過ぎる、あの彼女の微笑みが頭をよぎっていた。

一度は息絶えたはずのサキが、ああして唐突に生き返っていたり。

霊獣使いは元々消えるのが仕事だし、単に何処かへ去ってただけだと。これはあいつ流の鮮やかな退散に違いないとして、オレは深く考えないことにすると。

あいつの答え通り……一旦ここで、別れを告げることにした。

あの根っから黒い女を相手に、この程度のことですげらくらいなら……あんな言葉は、そもそも口にはしないのだから。

そして、サキの方が一段落して、タツクがようやく戻ってくるまで……オレはただ、崩れ落ちた下宿の壁に持たれかかって。段々と黒ずんでいく空と雲を、静かに見つめていた。

*

それから数日。

都市長の急な負傷と共に、うやむやになって終わった新政策の決議総会が過ぎて。

下宿があまりにひどく壊れてしまったので、都市長の護衛陣を狙った爆弾テロとか何とか言って、弁償は都市長にまわすように借り元と交渉しながら。オレ、タツク、サキの三人は、ウエイドの下に転がり込んでいた。

「ラストイクーン……大丈夫……？」

ここを選んで失敗だったなと思うのは。

それから毎朝、心配でやつれて死にそうな顔をして様子を見に来る、オマエこそ大丈夫かというウエイドの姿があった。

「……うるせー……生きてるから頼むから、寝かせててくれ……疲れてんだよ」

「そっかあ……よかったあ……。君の住んだ所のは、僕がちゃんと話をつけておくから……心配せずに、休んでるんだよおー」

……とりあえず。

よろよろ、と出て行くその後ろ姿に、いや、いいから……と、何度も遠慮するオレ達ではあったのだが。

ウェイドはそれも構わず、メリナの病院にも皆勤を続けながら、仕事だけはさすがに、初めての有給休暇をとっているのだった。

……あの後。サキは単に、疲れて眠り込んでいただけで、タツクもオレが回復してたし、重態だったのはオレだけだという話だった。

「いやあ、面目ない。ラストって意外に中々しぶといし、大丈夫かかって思ったんやけど」
オレよりサキを優先して連れていったタツクは、別にそれで良かったんだけど、何回も申し訳なさそうに謝ってきていた。

「何謝ってんだよ。そもそもオマエらを巻き込んで、迷惑かけたのはオレの方だろ」

「それもなあ……力になれんで、すまんかったなあ。せつかくらっ君が、俺らに初めて、自分から頼ってきてくれたのになあ……」

「はあ？」

ぶすー……と、ひたすら無愛想に答えるオレに、タツクはうるうる、涙腺がかなり緩んでいるようだった。

「ラストがちよっと、元気になってきたって思たのに……俺が不甲斐ないせいであ……」

「オマエさ……霊骨がまだくっついてねーもんだから、情緒不安定になってないか……」

……タツクは明後日、ディアルスに帰るところが決まった。

首の傷はオレが治してしまったものの、霊骨をさちんと戻そうと思えば、ディアルスでしっかり治療を受けなければいけないからだ。

別に霊骨は、サキのものを使って黒い狼を実体化したSKYのように、体の外で使うことも出来るみたいだが。タツクはそれでは落ち着かないらしく、帰国を決意したようだ。

「私？ ……帰らないよ？」

元気になったサキはあっさり、タツクに対してそう口にする。何やら昨日辺りから、長旅用の準備を始めているようだった。

「でもサキ……オマエは今後、どうするつもりやねん？」

「……ラストイがもうちよっと回復したら、私も、ここを出るよ。いつまでもお邪魔してたらウェイドさん、何か死んじゃいそうだし」
サキの霊骨は、オレが渡した新武器に、サキが自分で取り付けていた。

……何故か結局、霊骨が戻っても、サキのヴァシユカは二度と現われず。代わりにサキが普段連れている霊獣は、実体化の時と同じ、白い猫になっていた。

それは要するに、サキ自体の変化を表しているのかもしれない。

サキはあれからめつきり、何と言うか……すっかり？ してしまった節があった。

「一人でオマエ、どっか行ってしまっくんか？」
一緒にディアルスに帰らないんか……と。

だーっと涙して、もうすっかり以前の口調は忘れてしまったようなアホのタツクに。

サキはアハハと、軽く受け流して笑うと、

「ごめんなさいい。私、ディアルスって実はちよつと苦手なんだあ」

ちゃんと言いたい事の言える……というより、言いたい事があることを自覚出来ている、少しは年齢相応になったような感じだ。

「私もしばらく、一人で旅に出てみたいんだ。

霊獣もちゃんと実体化出来るようになったし……もう私、一人前でしょ？」

にこにこ笑いつつ、わりと凄いいことを言う。

「アホか、外の世界は危険が一杯やねんぞ！」

「わかってるよ。だから修行にもなると思

うし……色んな出会いも、あると思うし」

……うえお？ と、目を点にするタツク。

……その真意については、サキはオレには、本音を語って聞かせてくれていた。

「もう私、ラストイとおとーさんには愛想をつかしたのだー！」

えへんという感じで、ベッドサイドで突然、

そう言い出したサキに。オレは、はあ。と、

よくわからず眉間に皺をよせるしかなかった。

「……あのね、ラストイ。ラストイは私のこ

と……何て思ってくれてるかなあ？」

「……………」

ちよつと恥ずかしげなところは前と変わらず、それでもマジメにきいてくるので、オレは。

「何って……単に、仲間だろ」

今更何をと呆れつつ……それでもオレなりに、マジメに返答してやる。……するとサキは。

「ほら、やっぱり！」

鬼の首をとったように、おとーさんと同じこ

とを言う！ と、何故か胸を張っていた。

「仲間でも十分嬉しいんだけど！ 私だって、

一人ぐらい家族が欲しいもん！」

……成る程と頷くオレに、でしょ？ とサキは、嬉しそうな顔をして話を続ける。

「私はこれから、私のこと……家族って言うてくれるヒト、探しにいくって決めたんだ」

その決意を口にした時、サキの奴は。

……サキが変わったことのきつかけ、黒い

彼女についても、オレにこう語った。

「……あのヒト……多分、無理やり起こされた誰かなんだよ。心が空っぽだったもの……私、本当に近くまでいって、わかったよ」

自分を空っぽの状態で叩き起こした何か……

目に映る全てに八つ当たりしたかったんじゃないかと。サキは哀れむように呟いた。

「あのヒト、ちゃんと自分の霊獣持ってたよ。

でも霊骨がなくて使えなくて、ヴァシユカを取り込めば解決するって何でかなって。実際、

それで実体化も成功しちゃったみたい」

二体が無理やり一体扱いになり、はみだした

分が実体で現われたのが、あの黒い犬らしく。

「私の霊骨は、あの黒いコからヴァシユカを

切り離すのに、必要だったんじゃないかな」

——黒い狼を普通の霊獣として使うためにも。

一方で、サキも思いついてしまったのだ。

「私とあのヒトも二人で一カウントだったから……あの時ならあのヒトが向こうにいたし、ヴァシユカも向こうから出て来れるんじゃないかって思ったの。霊骨がないから、私の体をヴァシユカにあげてみたんだけど」

あの猫が喋ったのは、要するにそういう訳だ。

一つの存在が霊獣を実体化する時、入れ替わる「向こう」にいるのは一体でいいらしい。

「にしても、フツーそんなん出来るのか？」

「ううん。私とあのヒトだったからだと思う」
白い猫は、今もサキの体の一部分として実体化し続けていた。それは、SKYもしくは黒い狼のどちらかが、「向こう」にいる証明でもある。「向こう」にも一体は誰かいないければいけないんだから。

……つまり。あいつはやつぱり、生きていると思っついていいんじゃないだろうか。

「私まだ、自分のこと、よくわからないけど……あのヒトは確かに、私にとっても近かった」

そういうヒトが、一人でもいたっていうことはと、サキは明るく笑顔を作った。

「もう一人くらい、いてくれてもいいんじゃないかな。私が誰なのかも含めて、ちよつとしばらく、家族探しをしてみたいの」

……それはいつか、サキに、冷たい現実を突きつけるかもしれない。

自分は人工的に生まれた命で、家族など一人も存在しないこと……けれども既にサキは、近いことを感じ取っているような気がした。

「……別にそんなの。オレに断るまでもなく、行ってきたらいい」

口調とは裏腹に、サキに対してふっと、笑いかけてしまったオレに。

「えへへ。……だって、ラストイは前に、わたしにきいてくれてたから」

いつかのオレの問いかけ……それに対して、見つかった願いなのだと、嬉しそうに報告してくるのだった。

「……でももう……あのヒトに会いたいとは思わないけどね」

サキはまるで、オレの内心を見透かしたかのように……その時は最後にそんな事を言っ、困ったような顔で笑っていた。

とりあえず今後の方針が立って、せわしなくなつたサキやタツクとは裏腹に。

オレの体調はすっかり悪化し、体を半分起こすのもやつとな日々が続いてはいたが。

……一つだけオレも、その後、自分の変化に気が付いたことがあつた。

「……なくなつちまつたな……オレの精霊」
それは別に、オレが精霊を使えなくなつたわけではなく、加護もそのまま受けてられつ。

むしろ前より少し使いやすくなつた状態に、そつと左肩を、自前の肩当てごとさすつた。

タイミング的には、この装具を本格的に起動した時か、それとも他の要因が何処かであつたのかはわからないが。

「まさか精霊も引越すなんて……世も末だな」

精霊はどうやら、サキを回復するより前にオレの中から、オレの左肩に埋め込まれた姉貴の魂へ住処をうつしていたようだ。多分、使ったら死ぬとかびびって最低限しか霊力を与えてなかったオレに、愛想をつかして。

姉貴は死んでいるが、霊力は魂の力なので、材料はオレの命だけど姉貴の魂からも霊力が生じる。今までは無駄になっていたその力が、精霊に渡ってくれたというわけだ。

そしてそのため。今は消耗してはいるが、前より少しだけオレには余力が出来ていた。

元々は、一つの体にオレ、姉貴、精霊と、三つが住んでる無茶な状態で、オレと姉貴で半分個でこの体の命を使ってたわけだが。

オレの方には精霊もいるので、実質オレが使えた命は四分の一。そのための衰弱でもあったが、今回精霊が姉貴にうつり、オレは命の半分は何とかフルに使えるようになったのだ。

「そうでなきゃあの時……あんな戦えるなんて有り得なかったもんな……」

どう考えても途中で死んでたろうなと思う。

その出来ない命を大切に使えと……姉貴と呪いを同時にオレに埋め込んだ悪魔は、何を思っていたんだろうか。

二十年以上を経ようやく、本来主となるべき姉貴の元へ精霊が還ったことは……オレの中から、色んなものを軽くしてくれていた。

「これからはオレの代わりに、精霊のこと。よろしく頼むぜ……姉貴」

そう左肩に、話しかけると。心なしか蜘蛛の足は、少し毒々しさが減ったような気がした。

きっと、今回の件での体の負担がもう少し癒えれば、少なくとも後一度くらい、オレも旅が出来る体になっているだろう。

だからタツクも、そしてサキも。それぞれ心を決めてくれたのかもしれない。

そしてあつという間に、二日後……タツクの出立の日がやってきた。

何とか自力で立ち上がれるようにまでなり、肩を貸してくれるサキと、タツクを外玄関まで見送りにいくと。

「……本当に大丈夫なんかいな、らつ君」
今更苦笑するアホに、当たり前だと答える。

「サキもあんまり、無理すんなや。ラストはこー見えて凶太いねんから、適当にほっとき」

「うん。私もそろそろ、いつラストイのこと捨てて旅に出ようか考えてるよ」

「……何かひどいな、オマエら」
三人で一しきり、笑ったり苦笑ったりしつつ。

……最初からずっと暑苦しい男は、オレとサキの両方を見て。年齢相応の大人びた顔で微笑んでから、穏やかに言った。

「……俺の仲間はみんな、俺の家族や。……だから……」

―サキもラストも、何かあればいつでも遠慮なく相談しに来いと。

「……………」

そこで、ついに耐え切れなくなってしまうたのか、サキの表情が硬くなると。ぼろぼろと、大粒の涙を溢し始めた。

「アホかいな。ついてこんつてゆーたの、オマエやんけ」

心配をかけまいと強がっていたサキの気持ちなんて、最初からわかっていたタツクは、落ち着いた顔で泣いてる少女の頭を撫でていた。

「元気にしてろや、サキ。別れつてのは何も、無理に言わんでえーもんやねんから」

どうせまたすぐ、何かあったら会うんやからなど、旅慣れている男は語る。

それはオレも全く同感で、腐れ縁の相手に、いーから早く帰れとだけ悪態をついた。

「……………」

段々と遠ざかっていくタツクの姿に。

必死に我慢するサキの頭をぼんぼん叩く。

「……いたあい。何するのよ、ラストイ」

「泣いてる暇があったら修行でもしてろよ。」

言っとくけどな、外の世界は本っ当に、いつ何があってもおかしくないんだからな」

わかっているもん、とサキは、

「その状態で出てく事考えてるような、無茶なラストイには言われたくないもん」

オレの考えていることくらいお見通しだと、不服そうな涙目で、オレの方を見返した。

「……ラストイはやっぱり、あのヒトのこと

……これから探すの？」

「……………」

黙って頷くと、そんなオレに対して、サキはふうつと大きな溜め息をつく。

「……賛成出来ないなあー。ラストイ絶対、あのヒトに何か、騙されてるつて」

「そうだな。そこがいーんだろ、多分」

迷いのないオレに、がくーつとサキは、こりやダメだという事を改めて悟ったらしかった。

正直オレも、未だにわからない事だらけだ。

あいつの言葉は……本当にどれも、空っぽ

なだけだったんだろうかと。

―わざわざあたしと話そうとするのなんて、

ラストくらいだなあつて思つて―

結局全然、その真意は尋けないままだった。

尋いたところで答えないだろうし……多分

あいつ的に、答えなんて無かつたんだろうし。

……あいつがオレをかばったあの時。

本当にあいつは。その後言っていたように、あたしを排除して都市長を説得してくれる

なら。それはそれで良かったんだよね―なんて内容を、一瞬で考えたんだろうか。

―よけたら、ラストに、当たる―

あの拙い声にも、本当に心はなかつたのか。

単にあいつが気付いてないだけじゃないかと。

ついついそうして図太く考えてしまっている

オレは、サキからすると相当浮き足立って見えているようだった。

「ラストイ……女のヒト、見る目ない」

「ほっとけ」

……実はプロポーズしましたなんて言ったら、サキはまた心配のあまり、せっかく決めた自分の旅までやめてしまいそうだ。

「オマエも本当、早い所出てけよ。ウエイドが氣イ使い過ぎてハゲる前にさ」

「それは心配かけてるラストイの責任！」

「オレはいーの。アイツらに薬、造ってやってるんだから」

「ずるーい！ と何故か叫ぶサキはさておき、その足元をうろつく白い猫に。」

……一年間、ずっと起こしてくれてサンキューとだけ、やっとオレは伝えたのだった。

「あ、良かった、みんな！」

朝から病院に行っていたはずのウエイドの、えらく早い帰宅に、サキと二人で振り向くと。

「……あー！ メリナさんだあー！」

オレを通して顔見知りだったサキが嬉しそうに、車椅子のメリナと、それを押すウエイドの方に、オレを放って駆けていった。

「今日は初めて、外出許可が出たんだ。もうタツク君は帰っちゃったのかい？」

「うわーん、おとーさんのバカあー。もう少しだけゆっくりしていけば良かったのにい」

「気にしないで、お見舞い沢山来てくれたし。今日もすぐ、病院帰らないといけないしね」

穏やかに語るウエイドの前で、メリナは少し俯いて、寄ってきたサキの方をあまり見ずに虚空を見ていたが。

「こんにちは、メリナさん。ほら、挨拶して」

サキが白い猫を促すと、後ろ足立ちした霊獣がメリナの膝に両前足を置き、俯くメリナの額にごつんと頭を嬉しげにぶつけた。

「……………」

猫の方を彼女はゆつくり見ると……ふわりと。

「……あー！」

メリナさん、笑ったー！ と、歓声をあげるサキや、慌てて顔を覗き込むウエイドに。

柔らかな微笑みという、それだけで充分な贈り物が出来る、脆くて儂い生き物の価値……

……オレにも少しだけ、見えた気がした。

何もかもなくしてしまったような人間でも、

何も出来なくなっていくヤツにも。

思わぬところで誰かの喜びになったり。

そこにそのヒトがいてくれることだけでも、

何かの力になるということ。

そんなことはどうやら、有り触れているみたいだった。

*

「やあ、久しぶり。……ラステイ君」

そんな呑気な声を出しながら、一ヶ月ぶりに顔を見せたそいつは。

ヒトの不機嫌さなど意にも介さず、部屋の窓をトントンと気軽に叩いた。

「何が、やあ、だ。今まであんた、何処で何してやがったんだよ」

「何って、仕事に決まってるでしょう？」

「……こっちの仕事は放っておいてか」

「あははは。ラステイ君、すねてるんだねえ」あれから一ヶ月も音沙汰なしで、どの面下げて戻ってきたんだときくと。そいつは、

「また近くで、新しい仕事をする事になったから。今日はそのための挨拶まわり」

そう言うって、意味深な顔でヒトを見ていたことと理由は、一週間後まで気が付かなかった。

……今回の仕事に誘われる前。

メリナが昏睡となつてから護衛がなくなり、姿を消したあいつが、帰ってきた時のことをこうして夢に見る。

窓枠で頬杖をついている女を、オレは窓枠に座って見下ろす。

「あたしはいない方が平和だったでしょ？」

「そりゃーな。ヒトを誑かした上に、昏睡に

追い込むようなあくどい奴だし」

「昏睡自体はあたしの責任じゃないけど？」

メリナ様が単に、脆いヒトだっただけだし」

「……この外道」

あー、情けねー……と。思わず溜め息をついていたオレに、彼女は、何で？ と笑った。

「……ウェイドやメリナには悪いけど……」

こんな外道なあんたが帰ってきて……」

顔を見て、少し嬉しくなってしまった自分が。

「……無様だっつー話」

「……そうなんだ？」

よくわからないけど、と彼女は不思議そうだ。

「そーだよ。オレは年々、弱ってるから」

タツクやサキだけならいざ知らず。こんな奴までいた方がいいオレは、本当に弱くなった。

十歳で里を追われてから、一人で旅をしていた頃はそうじゃなかったのに。この一年は特に、誰かがそばにいることの生温かさに、甘え過ぎてしまったんだろう。

「弱いつてことが、無様だつてこと？」

「……それ以外に、何が無様なんだよ」

「ヒトの言う無様って、弱いこととか、それ

そのものじゃなくて……弱いくせに棚上げしたり、履違える醜態のことなんじゃないの？」

……オレの内心なんて、何も口に出してはないのに。その女はそんな風に、弱さを嫌がる諦めの悪いオレに微笑むのだった。

「あたしも、無様なあなたに会いたかったよ」

シスコンめ、とまたしても笑うそいつに。

いつかはオレも、違うしと言り返せる夢の

見方を、しばらくは探してみようと思う。

—あなたに幸せになってほしい。あの日の
依頼の意味はほとんどそこにしかなかった。
依頼者は、黒いケモノが何も持っていない
ことに腹を立てていたのだから。

自己満足の割合すらも少ないその依頼は、
「幸せ」を理解出来ないケモノには、あまり
に困難な要求となる事に気付かず。

灰色となったケモノも、そうして夢を見る。
その意味もわからないまま、大切に抱える。

ケモノにとって、生きていく事とは単純。
日々の糧を得るために動き、休息を繰り返す。
時に何かで心地良い時間が生じることはあ
る。けれどそれは自ら求めるものではない。
日々命を繋ぐ中の副産物に過ぎないのだから。
ケモノとは多分そういうものだ。それでも
たまに、ヒトに近いモノに見えることもある。
動物に心を感じるヒトもいるのだから、それ
はそんなに、珍しい事とは思われなかった。

だから。ケモノ自身の幸せを望まれた時、
ケモノにそれを叶える術はなかった。

先のない依頼者が、あまり意味のない事を
望み、その可否は二の次にしていた。それが
わかるケモノに、他に何が出来たのだろうか。

叶えられないならば、消えようと望んだ。
それだけは、本能では有り得ない真心だった。

「……そう考えたら、あんた、凄いな」
心ならずも彼は、笑ってそう呟いていて。

「とりあえずはきちんと、双鎌を返さないと
……契約違反で殺されるのはゴメンだしな」
そうしてケモノを探す旅は、依頼者にとって、
決して意味のない日々ではなかったのだろう。

「もしもあんたが、また現われるなら……
依頼を叶える方法、見つけられたんだろうし」
その日がもしも訪れるなら、それは幸せの
日になってくれるのだと。

たとえ残り少ない日々だったとしても、今
は信じて、楽しんでいけるのだから。